



特43

93

梓堂泉榮

091441-001-4

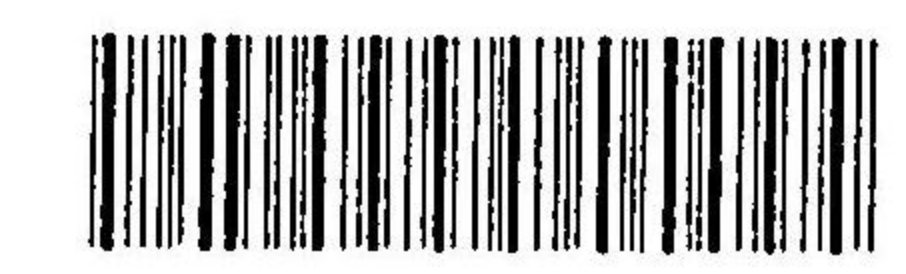
特43-93

武蔵坊弁慶物語

白頭丸 柳魚/編

M20

DBN-2354



武藏坊辨慶物語序

93 夫大人道

は往昔より辨慶じまの着物を着て出ざるはあ

草の中にも辨慶草は根づよくやさし辨慶蟹は色赤くして

おのづからたくまじ左邊は化物も辨慶が勇氣をうたひ草

もつよきを以て名づけ蟹も亦勇氣ありてたくまじ姿に

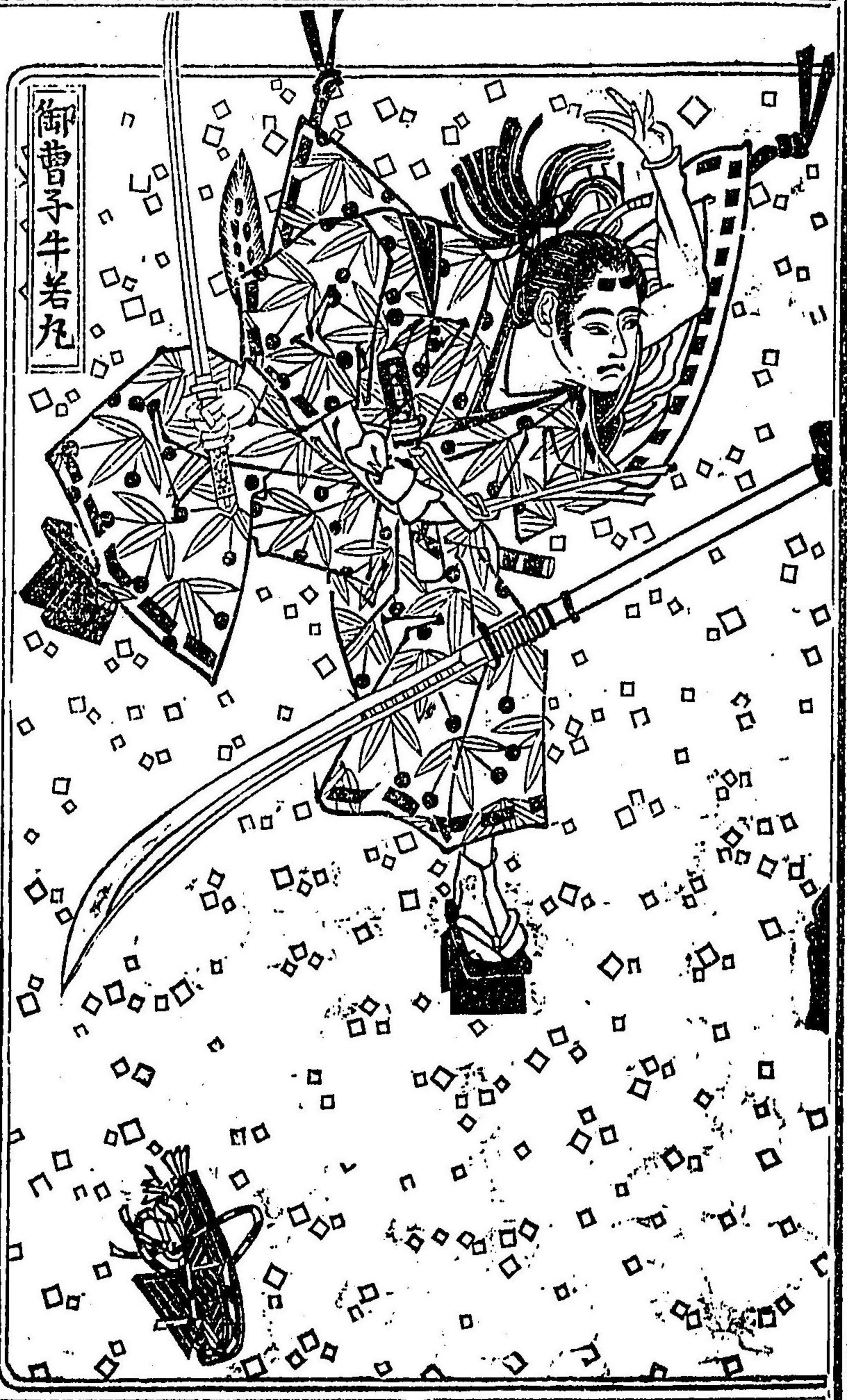
よつて名づけしが如し其辨慶が小年より晩年に至る迄の

物かたりを明細にして洩さず一小冊とあしたる榮泉堂の

主人にその序文を乞はれたるによつて一寸此に記す



105233



御曹子牛若丸



武藏房辨慶

若原國士



五
二



岩原國古志





武蔵坊辨慶物語

武蔵坊辨慶物語卷之壹

江戸 白頭丸柳魚編

第一回

熊野の山に生佛丸降誕す
書寫の麓に山の井癡兒を養ふ

嘗て西域の阿難の美女に因て情を勵かし其色慾を却て生天の爲に勉て戒を持つ亦吾國の淨藏貴所は、個の孩兒を膝にたれど尙其行方おとろへず八坂の塔を禱りかへきに至れり手は取るからにゆらく玉の緒とみし志賀寺の上人眞葛が原は風騒ぐと詠せし清水の和尙何れも道徳微妙して後世淨屠の龜鑑となれり彼をもつて是を視れば釋氏のうねふもあながち此道なしといふべからず故に既に經にも色即是空と説煩惱則菩提と教ゆ然れば這惑ひより一朝武門を棄て佛門に入り碩徳の芳名を永く後の代にとめし例なきにしをあらす茲に彼源の御曹司牛若丸を扶て平家の強敵を西海の波に漂せし西塔の武藏坊辨慶が發心せし縁故を尋るに往昔平氏未盛たりし頃紀州熊野の別當は辨正といふ人有り其先祖は天津兒屋根の命の苗裔中の關白道隆卿と聞へし殿上人よゝりしてろれより數世連綿とる家柄よて荆婦ハ二位大納言何某卿の御娘也奈何なる宿世にや齡ひ傾く迄子といふものなりければ

夫婦迭に是を愛ひ然るべき傍室を抱へて子を産せばやと其人を選みしかど斯る片郎ふりて
れどと思ふ者も亦く一歳弁正花浴へ登りしが其頃ハ白拍子てふものありて舞奏またハ朗詠
催馬樂なんどうたひて酒宴の興をうへ貴人高位ハ愛せらるゝ者多かりしうが亦うゝ其名を
山の井と呼ぶハ播磨の國の産れよして父ハ源氏の被官何某といふ者の娘ありしが些の仔
細有て都へ來り白拍子とあれはにやあけを道山の井ハ美目容艶麗のみならず志操優みや
さしき者なりけれハ弁正に旅寐の寂莫ハ不圖彼山の井ハ剛初遂にりの身を購ひて本國紀州
へ還り荆婦よも云々の由を語りて傍室とせしに山の井ハ一點ハかりも高慢けわひなく弁正
夫婦を敬ふと大うたみらす萬最信やかハ進退けるほどハ夫婦が歡び比にもなく淑女を得
たりと愛いつくしみ最睦しく暮らしける有斯て又一歳ハかりを送りけれども山の井よも子
いできず夫婦ハ最本意あげある面色なるに山の井も何とやらハ影護さなくハ醫療手を尽す
といへども更よもるゝハなかりける爰ハ其頃此紀の路ある片邊に周雲山鱒淵寺といふ山間
若あ本尊ハ釋迦無二世尊の金佛也其來由を尋るゝ何れの頃ふや有けん道熊野浦に船がハ
りて風待船を鱒鮫魅いれて既ハ船をくつがへさんとすむに至ハ道船の船頭何某といふ者
俠氣なる漢兒にて個々ハ打向ひていへらく所詮此巨魚の魁入れまうにハ助りがともしかじ
吾命を捨て渠を退治して見やとて豫て準備の一腰を積鼻揮ふるべきと海へさんぶと飛入

りしかば鱒鮫ハ大なる口を開て彼船頭を啗一呑ハ吞けれハ船中ハありあふ個々道光景を視
て肝魂も身罷ろハ怖れおのゝき今に命奪つるハ絆よと畏心もあかりしが稍有てさま
も廣き海原只一面ハ朱ハ染て彼地獄ハ有りといふある紅蓮大紅蓮も斯やと思ふハかりなる
に再び驚きこの奈何と海の面をかかむるハ彼鱒鮫ハ水の上ハ浮いづるを情見れば船頭何某
ハ辛ふして魚腹を研破りて全身只朱に染たるまハにて出たりけれハ儲ハ恙なくありけ
るよと人々うちよりて介抱しけれども久しく魚腹ハありける故にハ竟に果敢なくありけ
り斯ハ尙鱒鮫の腹をさぐるハ唐銅の釋迦佛出たり最あやまみながら這處ハ彼鱒鮫の枯骨と
船頭の位骸を埋め菩提のぬめにとて船人ども打集ひて一字の堂を建立し魚腹より出し釋迦
佛を本尊とま寺号をハ周雲山鱒淵寺となづけしハ郷人等ハうのまハよわにぶち寺とも呼
あしけるこの最往昔の絆ハしの定めて文書も有つらんが數度の兵火の爲に烏有とありしや
啻里老の口碑に殘れる耳ふして幾千歳を経たるといふ事を知らず斯て道釋尊克人の願望を
かなへ給ふとて遠近の老若群參して千般萬般の願をのくるハ一ツとまて叶ハすといふ事な
し山の井ハ許多の黄金もて身を購ハれしハ全く色を愛玉ふよあらず世繼を究めんとするよ
見なくてハ大人のさところ本意なく思ひ給ふらめ僥倖なる哉 淵寺の御佛ハ靈驗灼然なるよ
し聞ハ妾も道御佛ハ禱なばあどか應驗あらざるべき然といハ道由を主の君にきてへあげな

此這御山に尊き權現のましますをさしきて來由も詳らならぬ御佛を祈ん事傍痛思され
 んの必定あり唯妾丹誠をこらまへ禱りもふさふさいしかじと心ひとつに思ひさだめ俄頃
 口嗽き鰐淵寺の方に向て遙拜し何卒聰明伶俐にして後代の名を誦すべき男子を授け玉へと
 只一心念じうの日より七日が間精進潔齋去て祈りけるを殊勝なれ所て七日満する夜夢の
 裡に鰐淵寺の釋尊の御前に額づきて念ずると覺へし釋尊微妙の御座に善哉汝吾も子
 を授けよと念ずる粹切あれと辨正と過去ふ善種を植ざれば今生に至りてを子に縁ありとい
 いへ汝が切なる誠心を感じぬのあまり吾假ふ汝が胎内ふ含り一たび人間界に生れいで、民
 の塗炭を救へんと思ふ也と宣ひて山の井が口に飛入り玉ふかと思へば夢はさめつ山の井の
 奇異の思ひをなして歡ぶ事限りなく辨正にも語らず意中に秘っていたりけるが果きて其月よ
 り腹のあたりふくらかに覺ゆるに扱ひ示現空まからずと愈恐もしく始て辨正に云々と語る
 ふ辨正夫婦も大きふ歡び竊に鰐淵寺へ使をたて、黄金許多を布施とし又折々代參をつかは
 して尙母子とを恙なからん事を禱りける所て夫婦の當る月を指折りぞへ一日三秋の思をな
 して待らちに定めし月よて産れず一月とをくれ二月と過れ遂に十八箇月にして四月八日釋
 尊誕生の日にあたりて急入産の氣づきて玉の如き子男出生しければ兩個が歡び譬に物なく
 聞昔より英雄豪傑月を越年を経て生れいでし例最多かれ這子定めて奇兒なるべしとて其名

を生佛丸と号け挿頭の花と愛いつくまゝ育ける愛ふわけて不思議なるハ鰐淵寺よて本日し
 も釋尊誕生の日なればとて寺僧未明より起いで、先本堂よりゆきて御佛の厨子の扉を押開
 くは奈何本尊の失給ひて影もなき僧徒の大きく驚き寺内のくまゝ捜し覓むるといへど
 も更にしれず僧は盜賊なんどの奪ひ去りしやと思へば陸術なく寺僧ハ只寺の搖錢樹を奪ひ
 れし心地しつ急ふ鑄物師に合じて竊に釋迦佛の像を造らしめろしらぬふりして居りけれど
 驟より顯るハいなまどやらん誰いふとなく遺風説して其後ハ參る人を絶々にありしと
 ん後文治五年閏四月三十日辨慶奥州衣川にて陣没せまをり又俄頃ハ這蘭若の御佛二鉢にあ
 らせ玉ひしかけ始めて人々辨慶ハ這釋尊の降誕を玉ひたるにさありけるよと必付しとなん
 星移り物變り這寺さへ跡なくなり行知人もまれあり後世好事の人辨慶ハ雲州鰐淵山みて勤
 學せしといふは這鰐淵寺を誤り傳へたるか未だ詳らかならず間話題休斯て生佛丸といと
 壯健ふ成長せし現ふハ似をやらす其性愚鈍にして書を讀るも數十返よして漸く紀得をれ
 どもうれすら朝に聞て夕に忘れ論語一冊得覺へずまた手習をさすれども恰も金釘をたし曲
 るる如く看官のハ上代の科斗の文字ふやと捧腹て冷笑者多りける斯りければ生佛丸と既
 此十歳及べ共浪花津淺香山をだにろくく得書す只ふさやかなる容にて石など印地打
 杯のみして遊ぶ程に弁正は是を視て方見事と思ひ示現を空憑よして這行粧にては我家を繼

すべき者ならずと思ふ物うら鐘愛もはじめに似ず山の井の道爲体も哀しきやるかたなく
 萬般阿利懲らしなごすれど一毫ばかりも用ひず 加之力あくまで強く終日山を欠めぐり猪
 猿を相人とま亦ハ余の見意を打たし杯するふを夫婦の殆どをそあまし或時弁正は山の井
 を近くまねき生佛丸は全く淵齋寺の釋尊の再誕あれバ此御山の法燈ををかやうさんもの
 渠あらでハと未たのもしく思ひまに案違ひやうの性質魯鈍なるのみかは心さま狂く殺生
 を好む穢子なかくをて吾家をつがせん事思ひをよらず吾も獨子の不便ふハ思へ雨葉の
 内につまきらずは後一山の仇ともなるべき者なれば竊ハ其許が故郷へ誘ひ行右と左もまて
 孚給へ御身等親子が生涯を送るほどの黄金は興へまひらせん喬梓の縁をこれ限りあり生佛
 丸斯愚なれば如今ハ何事も辨へ知らねと成長て辨正が見なる事を知りて再び御山へ來らバ
 却て父祖の辱をうやかす難なれば渠には吾子なる事を察しら給ひろ早疾々といろがし
 たて一封の黄金を拿出して與ふるよ山の井ハ愁さやるかたなく泣々生佛丸にも支度さし
 行装ろこくよ調へ最懇よ夫婦に暇をつけて立出るよ生佛丸ハ恩心ふ出行を嬉しと思
 ふけハひにて衣を着替先よ立ていで行後影を見送りて辨正を漫涙よ咳びけるぞ理せめて哀
 れなも扱も山の井ハ吾故里なる播州書寫山の雲よ遠りけるがハや此程ハ父もこの世を去り
 母方の叔父ハ瀕畑耕作といふ水呑農夫あり幽けき暮らしながら最信やかなるものなりけ

れば云々の由を告て邊り近き處ハ小家のありけるを購得て茲よ移住昨昔ハ似すいとわび
 しくぞくらしける生佛ハ猶山野を駈めぐり惡足播の春の日の暮るを惜める風情あるに母は
 涙の乾くひまもなく歎き哀しみ早晩あがき病着となりければ耕作は大きに驚き急ハ醫師を
 まねきて醫療をこひ日毎よ來りて看病等閑あらすといへども日々よ重りて病且夕にせまり
 ければ山の井ハ叔父と吾子ハ枕邊よまねさいひけるやふ嚮にも聞へまひらせし如く這和兒
 ハ 淵寺の釋尊の降誕ましくたるなれば定めて聰明伶俐よして家をもれとし父母の名を
 も顯さんものあめりと思ひしに然ハなくと斯る世の廢人となるハ奈何やと朝暮かなしみ
 竟ハ道病着となれり今ハはや陽炎の夕を俟よりはかなき命やと思ひ極めハれば白地よき
 こへまひらするなり何とぞ妾亡後は此子を寺へ登せ法師よありとして玉らハ些ハ罪障生滅
 するよすがはをなりなんかといひつゝ豫て認や置たりけん何か書たる物を拿でハ生佛丸
 が守袋の裏へ押入れ其許愚なる心にも能聞玉へ此守ハ母が紀念と思ひて一生懸命の時に至
 らずバ必ず開き玉ふなよ言遺あたき絆ハ澤されど現心ある御身にハんは牛に向て貴き經
 を説ふひとし尙父母戀えと思ひ玉はハ經の一巻をも讀ならいて出家堅固にとげ玉へと云了
 て涙雨のごとま生佛丸流石愚なれ心小も哀しくや有りけん言葉なく唯默然とさしうつむき
 て涙ぐもたら行粧ハいふよりもあは哀れなり耕作ハ始終鼻うちかみて山の井に打向ひなど

て然心細き絆を宣するや都會に似ず片邑村落の万端不自由にして果敢々々しき醫師の
なくともつとめて服薬し給へ、争う治せずといふ事の有るべき鬼角に病と氣より生ずる
とかいふあるも自ら養生し給へかし人間萬事塞翁が馬とやらん毛色よく聲うるのしき鳥
人の爲に愛せられて籠中の苦患を得る又毛色もふく鳴音もうるはしからぬ鳥の却て日
が随意雲井に遊ぶと生佛丸が其性質の鈍さなま才覚あるとりの天然を全ふするよよか
りなんよし吳竹の世の中の人々に萬の松原といへる、身ころうめやすかれ都て幼稚うち餘
りに賢き兒の世を早ふし亦成長しなむかひて愚に返るなきいふ事なきよし善むら生佛丸
も今歳ハハや十才なれば今二三年も過るなら些ハ物の心を付ん道子が事し愚念せず疾く本
服し給へよ速日脚も西へ傾たるに端居して風よばし雷り給ふを翌ころ又來て視舜なんやよ
生佛丸よ平生とハハければ些ハ又惡遊戯もやめよして母御に心をつけ給へと最町噂も言悟
まやをら鉄を打かたげ遠いげよ出去りぬ

第二回

孤兒を憐れ耕作登山を勸む
悪漢を懲て鬼若危難を救ふ

却説山廻井ハ其夜さり透し果敢なく成しう生佛丸ハ慌忙きよと泣聲よ近隣の人々は何
事だやと驚きて走り來り道爲体を視て急ぎ耕作許告げけるよ耕作ハ遠しく山の井が家よ

來日見るにや絆切たれば詮術なく泣ける生佛丸をばげまし涙ながら隣人をかたらいて野
邊の送り形のごとく營はてぬ斯て母の遺言のごとく生佛丸をバ環て耕作が檀越なる書寫山
の學頭觀慶阿闍梨の許し將て行母の遺言を物語り御徒弟となし經論のハまをも辨へさせ玉
いらば亡母をさこそ草葉の蔭より歡びはべるべき惡絆あらハ難度も折檻ま玉ふとも苦しか
らじと首置て立返りぬ夫より阿闍梨は生佛丸を膝の元におきて勤學せさせ玉ふといへども
生佛丸いさゝかも是等の絆をつとめず稍もすれハ難ふよぢのぱり溪よくたり猪猿をどらへ
打殺しおとして少も法師の行狀をつとめず阿闍梨ハ此爲体を憐して屢教訓をくハ給
ふといへども生佛丸は唯空嘯て一點ばかりを用ゆるけどひなきよ呆れはて、予在しける
爰に又同じ寺に信濃坊海圓といふ納所あり渠は些の才學ありといへども其性質奸佞にして
表ハハ珠數爪操て最殊勝氣なる面持すれど其内ハ破戒無惡の惡僧にて鉢をバ天蓋と號け
鉢をバ踊子汁と呼び酒をバ般若湯ととなへて吃し平常扁鵲と化て遊里に通ふ斯る白痴をれ
ハ生佛丸が艶麗なる容に惑ひ白地に言よりけるよ從來現心なる生佛丸右左の應もなく力に
まかせてしたハかよ打懲らしけれ海圓ハ太く怒怒り是よりして生佛丸がとをあしさまに
言なし寺を追送さんとしけれども勸慶阿闍梨ハつやハ承諾玉ハ渠魯鈍なりといへども
耕作が憑み黙止がたしといひ且此兒佛縁あり心永く教授せよと宣ふに海圓ハ再び師の坊に

向ひ渠經を教ゆれども朝誦をつとめんとせざれば薪を樵らせ水を汲せ下職の業をつとめ
 とすべしといふに阿闍梨もうのいともかふを渠が心よまかせよかしと宣ふにやがて海圓は
 生佛丸をまねぎよせ云々のとを命ずるに生佛丸の仰かして候とて其日より山に登りて
 薪を樵り已が脊より高き荷を背負ひて返るより一山の人々哀れがりて渠は由緒ある者の手
 なるよしなるに奈何其身の魯鈍あるといひあがら木樵山賊にたじく斯く日毎に重荷を
 負ふに佛はあらで負荷なり負荷よ〜負荷若よと秀句せしよりして生佛とはいふものな
 く只負荷者と呼なしぬ又渠が心よまの猛く強暴あるを比して鬼若とも卓号まつ斯て鬼若の
 勤學の氣づまりなるよりは却てこれを嬉しく思ひ日毎に薪水の事を司りて日を送るうち
 一時光流水の如く春と過ぎ秋とくらまて生佛丸十六才よりなりける斯く一時事務の事ふ
 つきて急に敵山迄用事ありければ誰をか遣はすべきと思ひたまひまが生佛丸の力量衆にす
 ぐれたるがうをよ速走りの達人にて一日より四十二里宛の遣を行ん事は必易しといふなれば
 とて其旨を命じ給ふに生佛丸の委細承諾して阿闍梨とりの書翰を受命これに狀管にむとめ
 て首みかくるに阿闍梨の又一封の金を拿出して路費にせよとて遞與玉ひ此書翰の急ぎの法
 用なれば必しも疎忽にする事なかれ返翰を請取らば少もはや立還るべしと宣ふよと生佛
 丸の仰かまこみはべるとて旅の粧ひろこ〜よして都をさして發足しぬ斯て道を急ぎ敵山

よ至り阿闍梨の書翰を呈し返書を書きて是を携へ足を早めて播州へとこ急ぎける斯て生
 佛丸はゆき〜て福井村といふ所の村稍尽所まできたりけるが頃正に文月下旬よして殘
 曇蒸が如くなるよ暫時憩て行へし最早山への三四里よは過るらすよとや日の暮たりと
 も平日よ往來途なれば夜るところ却て涼しけれとある木の下の衢堂ある椽類よ登り袂包を枕
 よしてとろ〜睡眠がし此程の勞よや前後もしらす高野にや日も西山に没し群鴉窩を覓
 る黄昏時にたよとせも生佛丸は眠り覺す右左するうちにとやくも二更の鐘鐃々と響き渡
 りける酒處に惡漢とふばしき大漢兩個して一個の若女に猿轡をはませ嗚々しり來り且女
 を樹の下よ〜しつけ押拭ひつゝ最誇貌にいへらく今宵のわたらきは吾都て十ふ七八な
 れに吾儕まづ道娘の破爪を賞断して其後足下又心のよ〜に樂むべしといふに一個が否々ろ
 れの僻言也附添來りし漢の年よりて見へたれど一僻あるべき面魂なりしを吾儕勇をふる
 ふて追しりせけたればとろ容易奪とられぬ然れ其功の吾にあり吾且其口切を味ひて後足
 下右も左もし給へかしと暫く舌戰する折柄天俄頃結陰電閃き一聲響く雷の音よ生佛丸
 は始めて目覺四方を見まはすに都てこれ如法闇夜の事なれば物の黑白はわからぬ折々閃
 く稻妻の光みすかしあがむれば山賊剪脛なんどの女を勾引し來りて且これを姦淫せんとす
 る爲体とふばしく傍の木根よ年若き女の縛られらるる蹊蹊にて猿轡に口をふははれけん

聲をもゑて泣行粧に思心のうのうちよも自然と備る惻隱の生佛丸の大きき怒り憎き小盜賊等の所業を辛目見せてくれんぞうかひ因て先一個の襟髪圍で投いだせば彼大漢の慌忙起直り大きに怒り這奴なごて吾を爰へ投出したるぞと乏圍荒く罵るうち生佛丸の又一個の足を奪て薙倒せば是も同く大に怒り這奴吾油断をねらひ身法にも足をなごし吾を殺して汝獨快く樂しまんとするあるべしよし日頃の約束を變じざる不正道止せば吾且汝が頭を斬て其後はしひまゝに這女と洞房の樂を極めんと刀を抜て斬てかゝることなれの賊の奮然といひ汝吾を先に投出したきあがら吾を殺さんといふころ不敵あれいで吾一刀を試むべしとたなじく被て斬てかゝるといへば原來烏羽玉の闇なれば兩個の齊く空を切り又うだつる足の下を拂ひなるとをるうち忽閃めく稻妻の光りに兩個の顔見合せ丁々はつしと斬結ぶも電光石火の暫の中またも闇夜となる体も送し難つ難れつまた果に左右へ撞的伏し息絶たるぞ心地よし生佛丸の這行粧を視て今の心易しとさぐりよりて彼女の且縛を解ほどけば豈のうらんや最前より心を痛めしうがうへふ今の雷にや怖けん氣を失ひしとたばまて齒を喰しぱり至身さへはや冷水ありさまに生佛丸の大きに驚き且呼びけんと思へども名をさへ知らねば詮術なく水を口よりかんと四下の清水を手よむすび只幾度かうへげども從來口を塞ぎたれば咽へとうらんやふもなし漸く巳が口にふくみ口うつしに移

しいれこや喃々と呼生れば不測や息を吹返し云と一聲叫ぶも生佛丸の歎びて心はたしかになり給ふかと問ふ女は漸々我にのへりて生佛丸向ひ何處の御方か知り侍らねと思ひもかけず斯厚き御介抱に預るころ宿世怪しき縁にせならめ妾最前惡漢等も驅逐せられ爰に誘れろの恐ろしき哀しき肝魂も身ふるはす戰慄いたりしふ一聲ひやく陽神に氣をとりうしない其後の只何事も辨へざりし君の寢よ妾が爲よの再生の恩人也作生妾といはんとする折柄又も閃く電アレントいふ間も中空に鳴雷に彼處女はゆるさせ玉といひかけて辻堂の扉を押開て周章ふためき逃むに生佛丸を辻堂の縁に置たる袂包ぱらつく雨は濡らさじと抱へて齊しく裡み入る折しも大雨頻りにして恰も盆を傾くるがごとく風はげしく鳴はためく雷の音きびしく更に物音も聞へざりけるぞ怪しけれ稍あつて風雨やみて本のごとく晴わゆるる處に大勢の人音して明松をふり照らし一挺の輜輿をつらせ爰へ來りしが兩個の惡漢が殺されて勤めく光景を視て扱ひ此四下へ勝れしものあらんと明松をわけよまゝをさがし覓つゝやよゝ娘よ娘様よと叫ぶ聲に辻堂の扉を叩ひらき柱にへるがしと彼處女は帯引しめつゝ立出るに迎に來りて漢視るより打撃びて扱ひ恙なくありけるよ去來疾々と言つゝ手をとれば彼娘は左右の應なく嬉涙ふむせびりよと泣を然もころとて脊をかひなで齎らしたる輜輿に打乗飛がごとくふ走去りける這時に至て月山の端より高

くさし昇りて四方を照らし夜半の鐘聲遙の笈にひびき折しも辻堂の扉を静ふ一ひらきて
 立出る生佛丸の手は何やらんきらくと元る物を携へいで月影にすゝまて左視右視るに珊
 瑚は黄金白銀をまじへて工と造りなせし劍ありければ扱ひ今の處女が落し行しものなめり
 と推し小膝を撲的うつ程もあらせず彼悪漢よろめきなから伺ひ寄生佛丸を只一討と聲を
 かけず研つくるを心得たりと身をわかへま持るる刀奪ひ拿細首宙に打落し自若として才立た
 りける畢竟還未通女の奈何なり者うろの次の密に分解を聞べし

武藏坊辨慶物語卷之壹終

第三回 美人に溺るゝ色中の餓鬼 子故に迷ふ闇夜の仙禽

爰に播州福井村といふ處の里保に肥田圃太夫といふ者あり先祖ハ由縁ある武家なりしが今
 民間にくたるといへども數代郷士の如くよまて暮けるが今の圃太夫ハ頗る文武をもあき
 らめ仁心深く萬節倫を専とをれども亦一郷の人の難を視てハ倉粟を開き袋を傾け是を救ふ

ものから村の者とつて尊厳せずといふ事なし道圃太夫ハ一個の娘あり其名を玉苗と呼り
 今歳三五の春をむかへて容貌玉の如く奈何なる貴人の姫君といふとも耻かむらぬ風情な
 れハ圃太夫がいつくしと大かたあらす幼稚より渠がためふ師をえらびて糸竹の調手跡花類
 十種香貝合あんど何くれとなく學ばせしに渠又一を聞て十を悟るの才智有りて和歌を詠し
 筑紫琴をかきならし都て浴人の罪のとして深窓にあるものうら一村の人々を只美麗とのみ
 聞て目前視たる者ハ穢なりける今歳ハ圃太夫が祖父の五十回の遠忌に當りければ其遠福を營
 ハやとて材中へ官觸らしめけるハ吾家久しく爰に住て五十年の遠忌を吊らんとこと最めで
 たま因て此遣ハ絶て精進物を用ひず皆鮮き魚のこにて非時を參らすやう思ふなれば本
 月本日夕陽方より香茅屋に來ませよと云送りける程に實や他人ハ飲食に集ふと膝の如く
 聴て本日よもなりければ老たるを扶幼稚を携へ肥田が家の門前に市をなしさしも廣やかな
 る容態に所狹迄居並び吾勝に食ひツ、吐を聞ハ斯舍利の如き米の飯に茶を添へ吃さんよ
 は精進物にて可ならんよ況て平生にハ目よのみ視る遣伊勢鯛のあつものハ餘も羌味し今一
 杯とかゆるを視兼てハ阿漕ぞと袖曳ハ漁師とふぼしく時ならざるを食はずと孔子ハ教へ玉
 ひしかど七十五日生延る此初物を見のがをえきと汗をも残さず食ふのハ村學究にやらん
 ずらん或ハ信やかなる志を讀め或割烹の鹽梅をたどへ果ハだみ摩ふりたて、異口同音よ念

佛し各位善をさしたるける這日の正賓客は檀那寺よりむかへたる彼信濃坊海圓なり渠へ出
 家の絆あれ別は精進の肴種を調へて酒をすゝめ夕飯をまいらするに海圓の從來破戒
 無慙の悪僧なれば精進酒の好ましうらねど流石に恥て左も云ひれず魚物を食て舌打するを
 羨しげに打視やり咽を鳴らせせ詮方なく精進物にてまごゝかゝ酒を呑し絆なれば早酔眼の
 朦朧と席に在合ふ娘の顔をながめて餘念なく涎の腮を傳ふるをたばへずされと皆是田舎野
 娘として海圓が心よの叶はず渠かこれかと思廻すうち主公圃太夫衣服を改てたちいでこの
 皆々をくころ茶給し予何のあくとも心にのなひし物あらば遠慮なくかへず澤山にとふべ
 給く信濃御坊と村酒なれば御心にのうなふまじけれと爛を直まて今一献と自銚子を手に
 勸るに海圓の頭を左右より打揺否々最早辰前より十分は飲め實ふ唐人の詞に花下に蹄を忘
 るゝの美景により樽前酔を勸は是春風と賦せしはさる事ながら兎角に酒の男同士にては
 味からず今日の法筵餽鬼のごとき農夫等も百味の御食ともいひつゞき這割烹を賜ふ事無越
 善根なれ貴家の令娘玉苗ぬじとやらん美目容うるのしく殊に筑終琴の妙手にあわをよし
 恒に阿闍梨の物語にて聞願く此筵に侍らして其一曲を聞んよは歌舞の菩薩の音楽も
 ままて御先祖の亡魂もささる歡び給ひなん法の筵に糸竹を催さんへ最似げあくるも思し給わ
 んが古より神佛の御前にて歌舞吹彈をなす事ありありて神も感じ佛も納受し給ふとしたさ

典籍にも侍るかし枉て一曲をゆるし給へと信だちてすゝむるに一座も列る人々もとは
 よき海圓御坊の悪立かな斯いへ何とやらん法筵にまねがれたがら自己の慰をいふとふな
 れど全く左にあらず是非一曲と望むふず從來娘自漫ある圃太夫なれば強てを固辞す奈何に
 も娘玉苗の幼稚より筑紫琴をかきならずすべも一りのべれで未其業拙なくて諸人み聞せま
 いらすゞきよのあらねを左程迄も宣ふものを固辞も却て罪得べき業なれば足らぬとと
 の幾重にもみゆるをを蒙り急しといひてやをら奥に入りしが暫時ありて玉苗が手を奪て座
 またはすみ海圓はじめ諸人の瞠を定めてこれを見るよ正ふ是貝闕の乙女人間も遊ぶよあら
 ずの天津空ある常我月宮をのなるゝかと思ふ斗りの美人なればさらぬたよ色好もある海圓
 目をあゝめにして鼻のあありをうごめかして右視左視て圃太夫に向ひ寔に令娘の容儀なか
 く高貴縮紳の姫君といふとも恥かじからず行末に定めし貴人に嫁し給ひて御身夫婦の老
 樂を逐め給はん事目前也と飲媚る一言も圃太夫の最嬉しげなる面色なるを玉苗のさしう
 つむいて傍痛く思ひを切斯るうち婢女の筑紫琴をとふで玉苗が膝邊よさしをくを圃太
 夫の視て疾々と催すに玉苗の詮術なく琴をひきよせ音律正しく秘曲を弾じ松風浪鼓の奥妙
 をあらとすゞ心なき田舎人も只管耳をうたてて静かへつて聞居たり頓て奏し終り最
 拙き一節を聞せまいらせととこ笑ひ給ふらめ赦させ給へといひさして琴をさしをくも満座

の人々阿呀と感じて暫らもやまざりける最早興も是迄うと皆々厚く暇を告て立歸るな
 かふ海圓の今此美人を視て心中醉るがごとく扱も世にハ斯るうつくしき女もあるものかな
 吾奈何にもして渠と一夜の枕をかわさんには死をも絶へて恨あしと及べぬ願をたこもけ
 れど故意とさあらぬ体よて立かへりしが只朝夕玉苗が容眼よさへざりて煩惱の犬れへを
 去らず晝夜心をあやましけるう淺猿けれ扱も回大夫が娘玉苗が標致世にすぐれたる緯遠近
 よ聞へければ多くの黄金を贈りて嫁よとらん婿よならんなどいふ者最多かりけれと圃大夫
 ひふへて是をゆるさず吾娘容貌すぐれて才賢く古の紫家清女の風あるものから何卒勢狂
 く位高き人を婿養として老の樂に末の榮花あらまほしと緯を右左に托て固辞けるに玉苗は
 此程より何とやらん心地常ならぬ面色にて兎角よ醜物を好み胸わろしとて折々生唾をい
 爲休よ父母の驚きこれ全く年來深窓のみありて氣鬱せまより斯る病を引出せしものなる
 べしと急ぎ醫師をよねきて見せしむるよ醫師ハ暫く玉苗が脈を診ていへらくこい全く懷妊
 ありしかも左り胎ふして男子なり早五月ばかり及べりさおは急ぎ腹帯をいめさせべし
 といふに父母ハ再び大きに驚き尙や竊情を通ひし忍違ひし男ふてをありやと乳母をして
 萬般尋ねさするといへども絶てあしといふ原來深窓にのみ在りて漫行をせざる者の然る者
 あるべきよふなけれは是ハ全く醫師の當推量の説ならんと又他の醫師を請て見せしむるに

これも又同じく懷胎ありといふに帆太夫の眉を經醫師にむかひ嚮に視せしめたる醫師も懷
 妊のよふに宣ひたれど吾娘深窓にありて漫りにいでず又家の内掟きびまゝ男女一室よ臥さ
 すいりでの私情を通れ緯を得んや加之娘も又孝順にして且貞より幼稚なり略書籍をを讀
 て唐の倭の烈婦賢女の行をもしれは父母もゆるさぬ不正行跡をするものにはあらざこい全く
 視立違ひあるべしといふよ醫師ハ尙頭を右左に打揺り否々然らば今令嬢の脉脉を診ふ
 に心脉の動甚しく腎脉是を按して絶せず是懷妊なる事明けし且左りの脉沈實なるを以て見
 れは極めて男子なるべし 情考ふるよ女子廿歳を越へて男女の交をせず偏小情慾を堪忍ぶ
 ときは其氣鬱結して夢中從男と交ると見で胎む事あり然れど實に陰陽交合するにあらぬは
 其全牀をあすみいこらず月滿て血の丸かせを産むこれを血塊といふと見へたり玉苗ぬし未
 十五才なれど女ハ二七十四よまで陰道通じ七七四十九よ一陰道閉るものなるがゆへ爾
 る病なれども官がたけれ左を右も且試に血をくだす藥湯を用ひて見給へといふよ實にもと
 て彼醫師が液湯を用ひけれどしるしハ更よなかりける

第四回

往時を語て玉苗節に死す
 鈍根を脱して鬼若真に歸す
 斯て其歳もくれて春と過夏と暮らるうち玉苗ハ腹のあまりいよくふくらかよ見ると不

審これ全く病の業なるべま氣鬱より生ぜし病あれば只保養こそ肝要あれどつねふの救さ
 りしが此程の日毎又邊り近き郊外或は川邊なんどへ誘ひてをつとら心を慰させぬかくて既
 又其年も文月十三日とありつ今日は孟蘭盆とて尊き奥となく寺へ詣り亡靈の追福を營むと
 とあるに圃太夫夫婦のよき折柄なればとて娘玉苗を將て書寫山の觀慶阿闍梨の許に至るに
 海圓の斯と視るより久々に戀人の顔を視る絆の嬉しく信だちて且客殿に誘ひ茶菓の管待
 いと懇み四方八方の物語する折々眼を斜にして展々玉苗が顔を視に玉苗はこれに懶れば
 て疾雨親の還れかしと心裏に思ひ顔をうつむけて居りける帆太夫の豫て奴僕に獲らしたる米
 錢を海圓が前よさしおきこいつものごとく御佛又供する代になして給ひねこれ又
 薄儀ながら御坊へまひらるなりと劍に錢二百銅を紙まつみて海圓が袂に押しいるる海
 圓は呵々と打笑ひなきと斯貧道と迄意を用ひ給ふ貧道の從來出家人の事なれば金錢を視
 る事瓦礫心ひとしさいへ大人の賜る物を返しまひらせんの失禮なるに似たれば音此儘に
 受れさめへるべしなど獨言つ頓て齋らせし米錢を佛前供じぬその跡とりの新田の畝右
 衛門田返村の桑作後家ものく身分相應に盆にのせたる盆供に打懸ともし破扇紗松工巢を
 くふ鶴の書も大おたけし摺箔の祖父の遺物にして千歳バウリと経ぬらんとせばへて古雅
 と奥ゆかま海圓は是等一々神靈の前々備へ鈴うち鳴らし先祖代々一切の諸生靈佛果菩提と

唱へつゝ又本の座まいなをり浩る折から八瀬畑の耕作は最垢じゆとたる針目衣の裾みじ
 かきをのせをりて諸人の後邊よりたづと盆をさまいたすを海圓の打視遣り耕作主今更い
 ふにを及ねぬ其許か許より憑越し生佛九法師まなさばやと吾儕のじゆ経をぬめゆれども
 覺んとはせず夜の火を見ると船を漕出し晝の終日山を欠めぐり殺生を好みて一山の掟を破
 ること數々あれバ幾度か追やらんとし思ひしかと折角足下の頼みこもたる者なればとて師
 の坊も早不便し思し給へ音のまよふ捨るきたれと從來一點はうりも法師の行狀をつと
 めざれば師の坊も呆れ果去る頃より山に登りて薪を樵らせ谷にたりと水を汲せなと賤の手
 業を營まむるは道奴のこれを恥るけわいななく日毎薪水の業をつとむるといへどもうれ
 すら見給へ今日も未朝より出て最早末の下刻あるに得歸らず畢竟是薪をこるをバ余所にし
 て野樂かわきてこる居るならめされば一山の衆徒等迄生佛九といたはて言はず只鬼若と呼ぶ
 をも實は無理あらず斯無益なる白病をいつまで寺にぞむべき疾々連て歸りねといわれて
 耕作頭を掻き宣然ハ些を無理ならねと從來貧しき小子が獨の口さへ食兼て年貢の未進も
 澤なれど里保さまの御情でとやらかふやら其日を送る瘦道家のうのなかへ今更口の増んこ
 とは最迷惑にいへるあり何卒御慈悲今暫く御山に置せ給はれかしと涙ながらに憑ける浩
 る折らら生佛九の己が脊とりも丈高く薪を負ふて立還るを海圓とるより聲うけて奈何鬼若

かばかりの薪をこらんと長の日一日うらん餘りといへば必し今日の盆とて参詣も多
く厨屋もいろがしきと油賣の時による疾々薪を木部屋へ入れ爰へ来りて給仕でも勤給へ
人をつまふに使うと下世話の譬も外ならずと仰がましく吐に生佛丸とこれを齧て一言半
句の咎もなぐろの儘勝手の方へいりしが頓て裾長き衣を着ろへ客廳へ出来り何くれとなく
働くに圃太夫のこれを見ていかさま今の壯童は耕作殿の姪御の都がたに給事して儲給ひし
生佛丸とやらんよて有りけり親になくても子の育と思ふよのまして脊の高く成長給ひたれ
バ吾儕も殆ど見忘れのべりき實に世の中いよいよにならぬものかな彼總角容貌の如く殊
更素性を賤しからぬと聞ふ愚鈍なりといひながら斯る下さまの業を勉て日を送るころい
ぬましけれといふを聞て海圓の傍痛くや思ひけん圃太夫に打むかひろの肥田大人の議論大
く違へり人の氏より育といへども暇に假用物鬼若めを然る素性なら歌へずとも外典の一巻
普門品の一部ぐらひは覺をすべきに彼白痴的の諸人よ鬼よくと晉辱らるゝをさぬ些
もつづるむむもなく机と勤學の氣つまより草鞋腰巾で山へ登り谷へ下り薪水の
業を司るを快事なるいぢ知らずなきて胤のよかるべき素性もしれぬ破落戸と轉寐したる父
あし子をふけて返れと然をいわれず人前つくる空言を實となま給ひ予這奴が頓沛造次にて
ろの父さへをさぞかしと想像のべるありと飲まで晋のつかむむる辞は耕作大に怒既にい

んどしたりしが否々山の井が遺言といひ如今這所よて其素性を白地にいふとさへ人もしら
ざる闇夜の恥かゝやかすのゑちらで誰かへうれを實説とせんいふいひぬよ勝るとは爰な
んゆりと無念を忍び涙を驟してこらへ居る心の裏や奈向はらん這形勢に海圓の彈つる傍
若無人尙耕作に打向ひ嚮もれ汝いふことと藝無し猿の鬼若丸寺に在て用なき白痴的早
く連て歸られよと生佛丸が肩さきをむづと掴で外の方へ引いださんとしたりしに生質愚鈍
の生佛丸も最前よの悪口を口惜しくや思ひけん大盤石のごとくもて些も動のず眼を怒ら
し物をもいはず信濃坊を佶と疾視て居たりけるに海圓這形勢を視て呵々冷笑鼻者身まら
ずと下世話の譬の汝をいへん敷役にたすの分際で師匠に齊しき師兄の吾儕をさまで疾視
なバ來世の比目に生れやせん幾程たのれが白眼バとて何程の絆有らんと又立かゝる腕ねじ
上もんざりうたせて彼首の板間へ頭轉倒と投いだせバ耕作遽て走りより忙しげに海圓を扶
起しつゝ生佛丸に向ひ汝魯鈍の身を以て師父にひとしき海圓ぬしへ手向するころ易からねや
と信濃坊の何處を痛みし玉のぬ敷這奴が不骨の吾儕にめんじ何卒ゆるま給へかしと説
る詞は海圓の打れし腰をさすりつゝ腹たゝしに聲ふりゑて優婆夷優婆塞比丘比丘尼と釋
氏ふはさまくの若別あり然るを優婆夷にたを至らぬ兒のぶんさいで吾儕を爰へ投つけま
惡行何よたふべき汝が日毎山にゆき樵る木よすら猶尊卑あり棟梁とありて人のうねよ

在るもあり又雪隠の板舗にいられ穢れし物とづかしめらるゝもありうがなかに神佛の御像も彫刻れて人ふ拜し敬へるゝ幸あれバ下駄や木履に遣られて足へのれて賤しめらるゝ恥辱もあり阿彌陀も下駄を同じ木の端吾儕がごとく法師となり今生ふては活佛ととわれ人ふかしづきうやまわれ來世の寂光淨土に生れ蓮の臺に上品の佛とならんハ必定せり其許がごとく生ながら鬼とよわれ白癡とのゝしらるゝうれすら恥ともれもぬ突虚的阿房羅刹となりやせん是を縦はゞ吾儕の佛に作らるゝ木よて汝ハ先法師のはく下駄も齊し今より後ハ鬼若をやめて下駄若とやいわん下駄なれば足をもてハ我土足を喰ふべしと足をあげて散々生佛丸を蹴返せば圃太夫はじめ在合ふ人々あまりといハ海圓が人もなげある進退を憎しと思へどさあふる理の當然に陰方なく手汗握る斗りなり海圓ハ此爲体を祝ていと快びふや下駄若よ其身寺院に在て法祿を食まをがら法師の行をせざれば武家といハ祿盗人盗人の折檻は斯ころせめと拳をかため最前投し返報と云ぬバかりのつゞけ打擲口惜ながら耕作が詞を守りて生佛の手もいたさず低頭平身悔涙よくれたりしが髪髪亂れ衣破れ余所目いふせき行粧も玉苗もあるにをあられず傍より父の袂を卒度曳つゝ聲をひくふし彼兒余りにいとれしゝ家尊大人能言してゑまひねといふに圃太夫打點點海圓ぬしのいハるゝ處理ながら地獄の釜の蓋さへあくと謔云盆の中最よきかげん赦し給へ生佛殿も今より

して必を用て師の坊や海圓士ハ傳給へといハとも海圓尙聞すいやとよ渠ハ原來横着者にして打るゝ時は故意としはれ空涙をこぼせとをゆるしてやれば次ハ行舌を出て吾儕を譏笑ふ事ハ吾疾よりしりつ今一掌を喰せずハ吾腹ハ争いんと亦つゞけさまふ打柏子に瓦落船と音して生佛丸が懐より落る物あり海圓手早摺ひあぐるを生佛丸ハ隠てこれを拿らんとを其手を拂ひ右腕左腕て信と疾視ハ諸人これを樹せと是ハ抑も片鄙なんぢハ見もあらはぬ珊瑚珠といふ價値き玉を黄金白銀以て潤色せま管なり管ハいふまでもなく婦女の髪のかざりなるゝ寺にゐるべきものならず思ふに還奴何首にてか盗み取り沾却なして買食の本錢にせんとかくゆるならんか吾儕が嚮ふ盗人と云し辞を今爰ハ符節を合せし倫盜戒サア何方で盗めりと妄語をいわず眞直ハ白狀をせハ殊により又ゆるをべき仕法もあれ外の事ハ兎も角も盗するぞ知りつゝも寺に置いてハ阿闍梨ハ從來一山の恥辱なり言譯あらバ疾く聞くと威丈高し嘗るゝ耕作もあまりかね生佛丸が襟髪つかんで奪て引よせさんくハ打擲なし最前をさいせんとして信濃坊の御詞も破落戸的の胤ならんと宜ひし時あんじが素性既にいわんごしたりしが今將思へばまだしも素性をいハで闇夜の恥をもあかくせざりびり氏より育といひながら奈何身貧に暮らせバとて人の物を掠めとり已が榮耀につうとんとハみさげはてゝる根生か草葉の陰から山の井が聞ば何程敷くらんよしや愚の心ふも少しハ恥を知るな

らば其身斗りか吾儕迄多くの人の見る前で斯まで恥辱を興へし世にもまれなる空氣者
 憎さも憎しとた、ひつ踏つ悔涙もむせひける身の過ちも生佛丸顔も得あげず平身で消もい
 りたき行粧也何思ひけん玉苗の遊しげふ走り寄落たる管拿より速咽へぐさど突立れば帆太
 夫夫婦耕作も慌忙をりをがりてハ物にばし狂ひ給ふ歎何故の生害ぞと涙ながらに尋ねれ
 ハ苦しき息を吻とつき妾全く狂氣せもず月頃親を欺きし先非を悔ての還自害父母の御前で
 白地も聞へあびんは影護恥かわしとの限りなれど懺悔に罪も消ゆと聞ハ吾身の上の一件を
 語りはべらん聞きたく思ひいたすも去歳の文月廿六夜の其夜さり月の出汐を拜まんと漫行
 の間まざれ悪者等奴かいさらそこれ村精尽處の辻堂へ倡引既に渠等けけがされんとしたる折
 ろら雨降出し雷さへたさろくしう鳴つためくも氣をうしなひ雲時前後も知らざりしが何
 國のたかたり一個の壯俊彼惡漢を研ころし氣をうしなひ妾をあわれもひどかたあらぬ介
 抱の誠心通じて息吹返さうれまと思ふ折からよ又一聲の雷に恐れ堂へハしり入り彼壯俊
 ふ取りついで暫く雨をしのぎしが縁のハしとや成にけん顔も得えらぬ其人の情に絆れ只一
 度まくらかわして何首の人奈何あるたかたと問ハやと思ふ間ものふ爺御の迎ひ影護さ何
 氣なきふりにて家へ返りしが跡にて思へば禰堂へ日頃秘藏の管を忘れて来たハ物化の幸倘
 彼人の手に渡らば再び巡りあふ便にありもやせんと心に秘て過せまうち何とやらん心地悪

く詐物のこが好もしきは扱へ正しく彼人の胤を此身にやせせむかと思へばいと、淺猿新
 聞玉ハ父母の徒者とと嘆かしに御腹立と思へばころ只病とのみ言ふらし今日迄つゝみた
 せしが親を偽る罪深のり然ハいハ女子ハ一生ふ夫は一個と聞ものをよしや顔も名もしら
 ぬ人にしてあるとて一念のや日か通らぬ事あらじと心の中に慕ひしが今日といふ今日爰へ來
 て視れば癡呆の生佛さま海圓殿のうち打撃いと悼しう思ひしが今懐より落し玉ふ道管は
 妾が物儲其夜にわたらひと男ハ則ち佛様と思ふにいと哀しとらさ其管とり疑うけ耕
 作儀の御折檻何といひ説辭なく顔も得あげぬアノ御姿いりて余所め見たりやうつ一夜の
 情も百世の命を縮る玉苗が心を不便と思しおハ御身の口より一遍の廻向が智識の引導とり
 遙にまさきて覺ゆるらし先立不幸は幾重にもみゆるし玉へ父母よ及る命の惜しからぬぞ日
 の目もみせず腹の子を聞めら聞に迷はずが不便とばかり言さして跡ハ涙よくれければ稍有
 て帆太夫ハ目をしけたき縦へ痴鈍下愚たりとも娘が左程思ふなら又詮術も有るべきよハ
 やまり一絆えてけりと夫婦が歎も耕作も俱に道理に俯沈む此爲体を見る海圓いと妬ましさ
 入立あがり扱ハ玉苗主が病といひしハ鬼若めがうのかし懐胎たるよてありけるかうれゆ
 へふころ玉苗殿が命を捨てて鬼若ハ帆太夫ぬしは娘の敵吾儕がためにも怨の仇いで息の
 音を止てくれんと生佛丸も撃てかゝるよ今まで伏して黙然るる生佛丸ハむつくと起信濃坊

をかい摺目と高くさしあげて遙の庭へまびいたせば在りわふ飛石に頭を打つけ腦くだけ
 微塵になつて死けるの心地より行粧ありあわやと駭く一間のうち勸慶阿闍梨の聲高く
 白露のたのが姿をうの儘に紅葉をけければ紅の玉と口吟つゝ立出給ひ空則是色則是空煩惱
 菩提今や鈍根斷絶して正覺を得る時至れり奈何に生佛日頃よかり心地清浄なりつらんと
 宣ふ辭にいつと踰踰最前海圓は打撃され忙然として放たせしに夢ともなく現ともなく黒衣
 の老僧あらわれ給ひ汝今ころ剃髮染衣の時來れり然らば亂れし世の中は法を説ともなう
 くもて衆生濟度の思ひもよらず故に汝今より羅國に飛脚し客の浮屠にありながら武術
 を磨き汝に勝る者あらばうれぬしたかひ蓋世の功を立たば慈恩佛に仕へ經を讀作善供養に
 勝るべし母の遺言今此時故が肌を守りひらかば素性を詳に知るべきやと思ふかと思へば我
 に返りぬぬの鬼もわれ此守護とひらきて見ればうたかたの消ても残る水蓮の跡なつかまき
 母の筆天津屋根の命の苗裔の關白道隆卿の後胤熊野別當辨正が一子小字生佛丸としるせ
 しかば却は匹夫鄙夫の子にてはあらざりしか是より最前海圓が吾儕を下賤の胤あらんと恥
 らしめたる恥辱を消りこれみな母の賜よといふ聲音さへ常には似ず悪河の辨舌滔々と流石
 高貴の肩ありし熊野の別當辨正が一子とてころはしられけり勸慶阿闍梨再曰く往昔耕作が
 故を誘ひし時既に凡骨ならぬを知るといへばを故意と下賤の業をゆだねぬのまよく進退

せしは過去の因縁をはたさせ一度男女の道をしらせ其煩惱の源を脱離させんが爲なれば也
 吾孫これを悟りしるといへば故意今迄御身等にも對面もせず海圓が非道も余所に見な
 せしは遺宿業をいたさんが爲也帆太夫ぬしとさ敷き給ひや皆是前世より定る處にして外典
 所謂死生命運のいかで人力の及ぶ所ならんや生者必滅會者定離喜憂樂は浮世のならひ
 雪井をいで、速からぬ解正か子を婿にせば家のはまれ此うへなしと因を説果を示すも六根
 弘通聖の辭苦痛をかよ玉苗の生佛丸が目前伶俐なりしを右見左見いと嬉まげなる面色よ
 て兩手を合掌て伏拜む勸慶阿闍梨は生佛の絆を托すと見へにける奈何のしけん玉苗云
 とのつけに反かへる拍子に船の子返りして忽産る、産聲は夫婦の再び打驚きとありあけ見
 れば正に是玉を欺く男子なれば歎のなかの歎と袖引ちざりとおしつゝめば生佛の帆太夫婦
 に向ひ今更いはんも其過をうごるゝ似て最面ふせなる絆ながら去歲の文月山山よりの返
 り道村稻尽所よ玉苗殿が危難を扶け辻堂へ誘ひいれし暗まざり春心動くを禁じがたくわ
 りなく枕をのへせしに何國いかなる人々とも問をせず問はれもせぬ其間御身の迎の親籠
 影護さよ出もせざれば御身と知らんよふもなし佛に仕る身を以て邪淫を犯せし罪深けれぞ
 彼も是も前世よりの約束事と誓給われかしうの代りに吾今より周國を漫遊し専武
 門に身をよすとも容へ圓頂緇衣の徒に身を終らんこれ令娘苦節よ死せし恩義



ふむくふ一箇の寸志妻子珍寶及王位臨命終時不隨者と從來三界無慮の境界謝靈運がむかし
 又ならひあらゆる名山靈境に錫を飛ま杖を曳うるをもつぱら柔和を常とし心又磨高麗
 劔武を藏の意を以て武藏坊となりの父辨正が辨の字を阿闍利の法諱の一字を取り今より後
 の弁慶と改むべしと誓ふつと切佛らへば阿闍利の始々感激まじくわれ聞給へ帆太夫ぬし
 これ迄逐に經卷を手にふれざりし生佛が妻子珍寶云々の悲華經の文を記臆し武藏坊とよび
 辨慶と名乗らんとといふ其字義甚だ分明たるは又の與る宏才博識ゆくすへ奈何なる者とあら
 ん今生佛丸が絆を以て見るとき又証がたし且生佛が殺されし信濃坊ころ破戒の惡僧諸天
 善生佛が手を借渠を罰し給ふ歟今生れる其兒ころ全く君の孫なればこれを持て世繼と
 し肥田の家を立給へ御身も先祖の武士と聞へ勇士の血脈にて家繼んは無越幸ひ又此倅成長
 して子ども許多あらならは總領に家督をつがせ二男の熊野へ贈り辨正殿の家をつがさば
 耕作の短勤が昔の過をたごふといひ且生佛が鈍根を脱して聰明伶俐にありし事を彼人は
 のうし聞ならばさころ歡び給ふらん是等の絆の縁に縁じめ耕作ぬしからひ給へと絆をちなく
 説示ま給ふに各々位あつと感じける當時阿闍利は再び辨慶に向ひ汝今より直に諸國をめぐ
 らんは今をこそ早かり我書翰を認てつかわすべけれは敵山の西塔より三年が間勤學せ
 上笠雪の勤め怠らずに忽一山の博識とならん倡疾々といろがま給へば辨慶のかしこみてた

うち頭を剃こばち衣服をあらため立出ればこなたは修羅の四苦八苦流石婿とも泰山とも
 いのぬい云ふよ増かみ真女の鑑出家の鑑武門の鑑と後の代迄龜の鑑の萬代も尽ぬ名殘の
 哀別離苦引はるへさじ地弓やまと魂雄々しくも思ひ切てぞ出て行

武藏坊辨慶物語卷之二終

武藏坊辨慶物語卷之三

第五回

辨慶學業稍成て山を下る
 橋内池魚の災に因て見を乞ふ

抑敵山一乘止觀院延曆寺と聽へし人皇五十一代桓武天皇七年の草創よして傳教大師の開
 基なり西塔の釋迦佛を安置ま東塔には大師を安置を横川よの觀音阿彌陀を安置を是を三塔
 といふ偕も辨慶の師父親慶阿闍利の命よ從ひ敵山に赴き西塔に住しければ是よりして西塔
 の武藏坊辨慶とてころの名乗ぬ斯てより辨慶の三伏の夏の日立冬の寒き夜も竟日徹夜手に經
 卷を捨ず顯密の學業精らぬものから忽圓頓實相の止觀を極るといふも更なり傍和漢の史
 典子諸百家通ぜざといふ事をし尙修學の暇に竊に深山幽谷よわげ入て巨木岩石を對人と
 して劔法を試み亦熊猪にまたがりて馬術を訓練なせするよ是もまた藝程もなく學ばずし

て其温奥を自得しぬさる程ふ隙行駒の只疾く爰ふ又三歳の兎鳥を送り辨慶ハ廿才ふ及びければ緒ハ師父の教へ給へる河清と或日天晴れ麗なるに從ひ山を下り麓の村ふ至り其所よ此所よと逍遙せしに忽町々砧々といふ槌の音聞へけるよ辨慶とは何等の家なりやと裏の容子を物色は是正に一軒の鍛冶家なりければ心中ふ思へらく吾今より諸國を經歷せんよ驅よ寸鉄を負すしてハ最便なしさりとて法師の身よて刀劍を帯したらんよは人騒盜老馬賊ありと疑いて怖るべし何をがなと且うちよ入て鍛冶家の庄よ打向て吾思ふ首懸をつげて行脚ハ携へて不虞の備へにござんハ奈何にといふよ鍛冶屋のゐるじ眉を擧めていへらくろハいかにも作りと作られざる事ハあるまじけれと鐵を以て金鎚を作らばよしや其柄ハ塵とも重くて持歩行ふ便り悪し師父斗敷に刀劍を携るを似氣なしと思ひ給ハ柄をバ堅木にて折り又ハ薙刀のごとくきたひて棒のうに仕込て常よは脚試と觀せて山路仄徑を突き締ちるときに至らバハね出すよふよ造り給ハ可あらん乎といふに辨慶限りなく歎ひ爾は柄の長サ四尺斗りよ造り又又の長も四尺斗りに造りて給ハるべし價ハ幾程ふても苦しからずと彼より一封の黄金を拿出して手附さして遞與し其造り果ん日を約し立歸りぬ斯と程なく其日よもなりまかハ辨慶ハ再び彼鍛冶家に至るに阿翁はそよと出て是を迎へ頼一本の棒を拿出して遞與るに辨慶熱見て其用ゆべき様を問ふ鍛冶家の主公打領て彼棒をどりあげ一振

ふるよと視へしが忽然として明晃々たる白刃ひるがへり出て恰を長刀に異あらず辨慶這形勢を見て掌を拍て大きに喜び約束のごとく黄金を與へと是を稿ひ携へて即時よ山よ歸り行装うとくよ調へて常處もあしに東をさして出行ぬ世よ辨慶柄も四尺又も四尺合せて八尺の大薙刀を携へまといふものハ是をいふ賊

是より下に肥後物語ハ辨慶が住れいでし前後の辨慶よて二十年ばかり前の話説と見給ふべし

越ふ浴陽三條に命商客よ橋内といふ者あり彼は陶朱持頼が富をなして黄金白銀許多積貯ハ高貴縉紳の御館へも入りこみて馴ふするものあら自と其威勢強く家居をてざくまく家縁數多もちて何くらからず時明ける今歳荆婦何某あるもの始と一個の男兒を産げれば喜ぶと限なく我家を繼ん者これをらでハとて橋次と号け愛慈と大かたならず爰よ又下野の國深栖の領主に深栖之助元重といふ人たわしけるは是も在藩にて浴陽にありけるが同年同頃ハ女子をもふけ其名を唐立と呼つ素より駿之助と橋内ハ莫逆の友なりければ一日駿之助ハ橋内かをもへ香耗て四表八表の談の序にいひけるやう吾儕ハ子供許多持るが上よ今歳又女子を儲ぬ足下は初て一個の子を得給へるなれば吾儕が今歳もふけま子を以て足下が子の妻と定め橋内の中より宇として今より後一家の因を結ばんハ奈何といふふ橋内ハかざり

かく打喜び深栖生り、涙の仲正公の三男よれりして三位頼政ぬしの舎兄たり斯る槐門貴族
 の人と縁を結ばん事件が洪福家の面目此上なきこと一讀にも及ばず承諾なし頓に吉日をえ
 らして橋内が方より聘物を贈りければ陵之助がたよりも婿引手を贈り兩家歡ぶと限りな
 し斯て又橋内は情思ふよふ吾家斯富て何不足なしと雖渠等二個成長までば最ながきよ
 世の戦國の時あれば不憶別れて又歳月を経て環會ことあんどあらんに當時送よ女とも夫と
 も証據あく便なからん幸ひなるかな年來吾家秘蔵せる花橘と号る名香は世よまたあ
 るべやうともればねば彼名木を引わかちて兩個の孩兒を齎らしなば環會とさきの割符よ
 是よろこす物あらじと光重にも思ふ旨をつけて隣緒の書付取らうへて橘次が肌守にむさ
 め其一木を深栖が家へ贈て唐立が守袋へ入れさしぬ橋内が遠謀へたして兩個一度別れて
 後再び此名香に依て萬般の禍を醸し終り聚合する因縁深天命の然らしむる所ある乎斯
 て其翌年霜月某の日浴中某の處より火起りて風烈しくさしも立連らねたる洛陽の堯魯地灰
 煙となり男女號哭聲街へ充滿るり爰に彼橋内が館よの橘次が乳母何某幼生を抱て庭前遊
 び居りまが道形勢入驚き慌忙逃いでんとせしがや四面に火うつりて出る事あたわす辛ふ
 して後門の方迄逃れ出しふ忽上より大やうある梁懸落て押に對れ死たりける然れど橘
 次が運や強かりけん幼兒のこゝろ恙なく築地の下の溝へ轉落て泣叫び殆々死すべく見へしが

適一個の旅漢、船のなかをかき日けて喘々走り来まが遺体腐を見ていとたしくや思ひけん
 見を火の中より抱きとり泣叫ぶをいふりつゝ院の子くぞ吐きつゝ懐へ押入れ又燃あが
 る焰下をかいくつゝ何處ともなく往過ぬ畢竟遺旅客は奈生者乎次々の條をもとて知る
 べし斯て程あく風休火静りて其首此首より辛ふして逃のびたる奴婢等より集て更けろの恙
 なきを祝するよひどり吉次が乳人のみ見へず從來愛兒の絆なれば何地へゆきまやと夫婦の
 物狂ひしき迄東徃西徃尋ねめぐるよ漸々乳人が遺骸を後門の邊よて見出したるよ扱は
 渠烟にまかれて死したるものなめりと思ふにつけて骨まづ打轟て吾子吉次の如何せしや
 と百端さかし覺るといへども更に影だに見へず尙や燒死せし夜やと思ふよ骸を見へずこ
 へ世に所謂神隠しなどいふものよやと其項の陰陽博士安部康親許いゆきて其有無を問ふに
 康親書をとり卦をしき少刻考ていへらく今得たる所の本卦の雷澤歸妹なり而て歸妹の初交
 變じ火澤卦となる卦の過なり本卦の雷の震あり變交の離はなるなり火あり火の禍によ
 りて一度離れんと易の表に顯然たり且兌の澤なり水子屬す祝ありよろこびといふ訓ありこ
 れを以て考ゆるよ水に依て命を全ふし廿歳余を経て喬梓再び邂逅すべし爾れろの折よの
 子んで大慈憐あるべし緯審に示しける抑此康親の晴明五世の孫よして先祖よ劣らず廣く
 天文曆數に通じ彼唐山の管輅召康節吾國の伴別當指の巫女あんどよをさく劣らぬ者な

唐立をまねきよせて光重の方今吉内が云り一有枝有葉を物語るに唐立の容貌を改めて云らく
 是必得ぬ泰山君の仰りな妾 最愚よ侍れども賢典のししくれをも些の學びるに史記と
 る云書に忠臣二君よ仕へて貞女兩夫に見へずとの見へる吉次君との横襟のうちよりの
 宇のこふて互ふ顔もまらさへれば豊都の康親大人の考よの年ふりて後恙なくて遇見るよ
 末のたまへりや彼大人の深く天文に通じ前経往時を説玉ふこと神の如しとか問侍るよ争
 かあやまつ事あらんやよしや吉次ぬし世よなき人となり給ふて生涯まみゆる事あらず千
 年経るとも夫は俱せに松の標の清らなる心へをば黄泉で聞へらままひらして遊の臺よ
 菅の根の永き契を結ばんころ最願わしうへるかしと涙を俱ねぬがふに光重殆ど感激し
 實や其許の親子ながら世に類なき節婦ありやよ吉内ぬし斯る健氣を子を侍る吾儕は最も幸
 なり否其許より我儕こそ爾る貞節の女兒を新婦にもたしし幸ハ黄金よまざる幸ながら悴吉
 次が世よありて嫁身よと呼れあげうの嬉しきや奈何あらん世に稀なる貞婦を嫁せしハ世
 よ稀なる我福よして又天にも地にもかへがたき只獨の悴の行術も知れぬといふハ我身にと
 りて不幸此うくや侍るべきいかよ唐立が詞のごとく康親ぬしの勘問疑ふべきにあらねハ
 遠からで悴が踪跡もしれ用筆めでたふ慈眉を開く時あるべき且夫迄ハ唐立をば其元が方よ
 預けまいらるるありと再會の期を約し袖衣以下奴隷許多を俱し下毛野にころ下向ける却説

平資盛に平家の威勢盛なるよしたかひ公卿殿上人へ對し失禮ある進止澤なりしハ忽ち罪
 せられて嘉應二年伊勢の國へ配流し給ひけれハ爲祐も退糧となり詮術なく奈何のせんと思
 ひけるがととも斯なるうへハ毒を喰ハハ皿をねぶれといへる 諺のごとく彼半縷約たる袖
 衣を掠奪して東國へ走らばやと竊にうの動靜を窺ふハ彼ハはや前月金買吉内といへる素封
 家に身を購れて吾妻のかたへ下りしと聞より且呆れ且悲れども詮術なく從來獨住の心身と
 ハ些の家財を沽却て路費となし父が所縁下毛なる高野の庄の邊りよ在と仄に聞しを便に
 して遙々ところとくだりける

當時前日に記す辨慶殿山を下て東行せし折と同頃の物語としるべし

第六回 破落戸昨の計を以て却を誘ふ 富翁便著無を憐で客を留む

この程に美佐崎太郎爲祐のゆきく下毛野高野の庄ふいたり知音を尋ねし其人のはや
 二三年ほどに死去て其跡だも定ならずと聞へしハ恐む樹下雨漏るハこちしと忽進退愛
 極り奈何のせんと管在茶肆に立よりて唇打懸澁茶を乞ふて是を吃し少時勞れを晴らし京
 行西行思ひめぐら居る 適向ひの方より歩行來る一群あり前よりみしハ年齢耳順
 余と見へて奈何も富有なる人となればし夫に従ふ一個の若女兒ハ小星よてやらんずらん年

未廿歳にも充てず彩麗衣を重襲て蘭奢の薰四下を拂ふて許多の侍女も傳れ其他奴婢多く誘ひて今太郎が憩ひたる床の前の行過るも原來色好の爲祐忽地蘭奢の薫鼻をうがつに斯る憂苦の中も不圖頭を擡て其個を見らば是正ふ都ふて二世と誓し白柏子袖衣にてありけられ愕然として大きに驚き這奴昔時の約よろむき桶内とやらんが僻妾となりしころ易からね寔や妓女に戀ふし實をもて戀とすと故人の語を今ぞしるよまゝ此上の跡追蒐て吉内共斬殺し我鬱憤をいらさんう否々遺計極めて拙し彼又宿恨を返すといふのこにまて彼も損ありて我に徳なま爾いへ此儘よして打捨ちらんも余りに口惜く且大丈夫の所爲にあらずと右さま左さま思ひめぐらまつ茶肆をいで歩行日脚も頓て肺時居所も近く心地しつ係る適向ひより来る一個漢行違ふさまに太郎が刀の柄よさげたる燈籠を奪て逃去さんとするをすかさず其首筋を捕へぬのれ白晝我燈籠を奪へんとするころ膽太けいれで某が首をいねて旅客の後戀をいろふべきうといふに彼須利の面色土の如くよして只た救し給へくと戦慄より外なし太郎のこの行粧を覗て嘲笑扱も汝の須利をあすに似合ざる肝のぞやうなる奴かな今我汝が命を助て大金を得る事を教ゆべきが我いふとを用ひてつとめて事をあしめてんや奈何よといふに彼劫の大よ喜び忽と大地を平身していふやう我儕道邊の者あるが素より袁彦道を好酒は耽り色に溺るゝを以て親しき一族も疎みへて誰ありて憐む

者なく詮術盡て晝夜遠近を徘徊して人の懐の物を盗とこれを市に鬻り其日の飲食にかへしが程なく其業も熟しける程無徒黨者我をさして白日鼠の爲六と綽名しつされバ終に今日のごとくおくれを取りし事なし此上に命を助け金儲の事を教へ給とんとあらばいなる辛苦もものゝと虎穴に入らずんば争か虎子を得んと故人の格言よくも悟りへるかまど最信だちて聞ふるも爲祐は再び飛六に向ひ爾る必ならば音聞さん折頃當國よ來りし浴三條の金商客吉内といふ者ころ當世無双豪富にまて多くの金銀を貯るものなり我彼を一劫して其資財を奪ひ奪と思ふに汝これに組すべきや否やといふ爲六これを聞て呵々と笑ひ彼儕も粗吉内が事を知といへども彼に従者數多あり然ればころ今世よ名たる熊坂殿をいじめ壬生の小猿摺針太郎をといふ盜栢張角にもまさりし大賊すう手ざませざるよ我儕がぶとせき小盜賊の争か手ざしのなるべきや遺事のみゆるし給へうしと舌を巻て怖るゝに爲祐の掌を拍て大ひよ笑ひ扱を汝の心の狭き事をいふ奴かな今吉内は夥の從者ありとも何々爾迄懼るゝに足らんや我別に計畧あり其計畧をほごすにに彼が自筆の書翰を得ざれば計を行ひ難し汝奈何よもして五三日のうちに彼が燈籠袋を奪て我よ得さまあバ夫を付て施すべき妙策有り汝より此一條を奪し得んやといふと爲六聞て然ばかりの事をあさんい最易し我儕是迄人の懐の物をとり又腰に提たる物を奪ふといふ唯袋の物を取るごとき覺ふ一度も不覺をとりし

事なし今鳥の過失は全く千慮の一失にして實に君が洪福のいたす所ありと最面なげに見ゆるにや太郎の打點頭然らば某の日迄は爲課て云々の所まで携へ来るべしの上は我別も妙策ありと堅く約して立別れ爲祐の邊り近き逆旅に在て爲六が書牘を待はせし頃て其日にもなりければ按のおとく一箇の燈袋を携へ來て太郎が前にさしたき日外囑給へる吉内が燈袋をば難なく盗み取りて侍るよし中を展檢給へと最諺現に述るよし太郎の頻りよ其伎よ長たるをたへつゝ燈袋を開て其内を見るに印形あり且黄金を貸たる券文又自筆の書翰幾枚もあり太郎は是を見て再白日鼠に向ひこれを手よ入るゝ上は忽大金を得んと最易かりされ人の耳に壁にあり石のものをいふ世の中は爰まで浮々ろの計を商議せんはうれ聞へん恐れおれれば人跡はなれたる方にいゆきて緩々と相譚べしといふ爲六聞て尤も同じ前よ立て逆旅をいで人なき方より行に傍に古びたる一箇の草井戸在り太郎はこれを見るより心のうちに點頭足を揚て後方より爲六が泊所を見すまも忽地彼古井に撲地と蹴落しければ白日鼠の阿呀と叫もあへず這上らんとをるひまに爲祐の四下よ在合ふ手頃の石を打こゝく遂に爲六を埋殺し爲爾と笑ふて素の舍りに返りぬ此一件は都て吉内が燈袋を手よ入て彼家にいりこまんといふ太郎が姦計圖をはずさず首尾よく計成しかば心中大喜小悦ひ頼み行装と一のへて吉内が家を訪ふに聞えよまざる家居のさま最奇麗なるに太郎はやがて裏に入て

案内を乞ふよ一個の書付立出て何處よりぞといふ當時爲祐の禮を厚ふしていへらく我儕の素洛陽の者なるが幼稚して父母を亡ひ只一個何某の君よ仕へ居りしが同僚の臆言に忽よるべなき身となりまよ日頃交り深き友のいへるに下野國高野の庄といふ處よ云々といふ人あり足下此人の許よ至り身の落着を計り給へと紹介の書翰を遞與し給へり小子其厚志を歡び聞へ頼て書翰を燈袋にたさめ雷國へ下り其人を尋ねんとせしに昨日不圖劫の爲よひうち袋を奪はれぬりここの口措と後追蒐て直ふ劫を捕らへ懷をかいたぐるに果して燈袋あり拿返して遺奴を二ツ三ツ打懲らし放ちやりぬ斯て舍りよ返りて後によくは是を見るに其色に似これぞ全く我盜れたる物よとらす茲よをめて大に駭さうの中を點檢するに印形あり且券何枚もありて阿家翁の姓名を記したれば始て其醜忍を悔み大切な紹介の書翰を失ひたればよしやうの人を尋ね行て實を以て告るとを世の戰國の時にして敵の間者も多かるに誰かこれを實として我儕を留る者あらんや然らんには尋ね行とも其詮なし爾とて都へ歸らんすするに小葉うち枯らしたる退糧の事なれば腰纏の時へ爰に盡て進退既に極れりこの我身の上の薄命を説のみにまて貴家の預らざる所なれど我身に付て又他のうへを想ひめぐらるに遺ひうち袋を失ひ給へつゝ貴家にも困じ給へめと今鳥しも故慮々々持來り返しまひらするありよく中改めて受取給ひねと實じやぬに語りて燈袋を遞與すに予取次の侍ハ少刻待たせ

給へかし主翁其由を稟べしとて奥に入りまが頼て出来りこなたへといふに太郎はたづ
 彼青待にしるがひ奥に入れ橋内出迎へて客廳に招じ且其人品を見るに色白く眼秀
 顔容貌堂々たる好男子なりけれ早内の心中十分彼を愛する意生じていへりける昨日
 不憶須迷の爲小道燈袋を奪はれ奈何のせんと當惑せし適よこ持來り給ふものかな
 今取次の者が話に聞け足下遙々此國へ下りうの紹介の書翰さへうしあひて進退爰極り給
 ふと聞くに最憚しく想ひ侍べり我儕も原の都の生れはり都と聞さへ愛慕けれ一樹の蔭一
 河の流れも他生の縁と成ものあら苦しからずは我儕が家に逗留して緩々と其人を尋ね静に
 うの縁故を告げばよしや書翰と失ふとも容られざるといふ事あらんやと愚慮もしく聞てゆ
 るにぞ太郎の計策既成れりと心中喜び陽にほますく禮を正しふしころの厚志の忝と
 しをいらへ其日より吉内と家に止りよろづ信やかゝ進止夙早起夜半に寢常座臥心を用ひ
 て内外のものを媚諂ふ程に吉内の深くよろこび淑人を得たりと暇ある毎よと首葉歌として
 古今を談するよ太郎又よく和漢の書に通じ辯舌蕩々とて水の下流に付が如く物を書かす
 れば草書拙からずうりけれ今の太郎あてならざるほごなりけれ爲祐と爲濟たり
 と一日袖表が四下よひとなき時を物色竊ふ低言くやうは汝我生と室を同去死しての穴
 を同ふぞんと誓ひつるに疾も其誓に反き道家の阿翁吉内を委ね我儕が許へは一言

の應もなく此下毛へ下り給ふと餘りといへば情も忍金銀に眼くらとて今の行状の奈何
 ぞや然れ我儕の往日の盟を忘れずもしやと思ふ心より偽の計を設け道家に入りて阿家
 翁の橋内はいふも更なり其他奴婢小厮に至るまで阿翁諂ひ其心かなわんとする誓心難許
 ぞやこれ皆汝にすることなりと涙をがらふ怨するよ袖衣も是を聞て最面なげふ斯いへば何
 ぞやらん言譯がましく思されんが都に在りし日兩個が中へ關ををへられ遇とさへも絶々よ
 なりし適道家の主翁橋内の黄金に富たる者あれれば主が爲成らんやと心にもあらで年
 關たる吉内にしたかひ艶言を以て彼を誘しうば竟に妾が身を購にいたれりとは妾が計爲
 課ぬと主かたへ云々のよしを告しらさんと思ふまもなく東國へ誘れしゆへ事の顛末をつぐ
 るよとしなく意よこらるるも此月日を過せり然るにまも亦當國に吟行妾が爲よいくろ
 の患苦を盡して當家へ入りて給へり言合さねき其志は是一ッあり此上と長君は陽にいよ
 く仁恵を専らとして内外の者をなづけ妾いまる陰ありて橋内を計り時を得て彼を斃し
 長君と阿固快く樂をどらんと遠くあらし怒意りて悟られ給ひぞと叫くにぞ奸智をたけし
 太郎爲祐疾も其心を得て打頭き兩人久しく閑談せん人の怪むべきの第一なりさらば其
 許もつとめて其計も怠り給ひすと更ふ課し合せ河清を俟ける
 武藏坊辨慶物語卷之三終

武藏坊辨慶物語卷之四

第七回

水四郎病床ふ古を説く
爲祐林下は雙寶の得る

争かひ想ひ有りとも知らずべきと詠し下毛野國なる室の八嶋の邊りふ中窪の水四郎と云者
有勢彼ハ若き時より俠氣の者にして列國に漫行し強をくぢき弱を助くる性質なりけるか今
ハ年老て荆婦を亡ひ唯獨の男子を持ち其名を吉次年廿歳許にして克父事て孝あり然れど
も家窮て貧く加 兼水四郎ハ先頃より重病に臥して起居を自らあらねバ吉次ハ 杖日
毎又遠近人に雇れて僅の價を得て父を養ふものうら已は都々鹿食を喰らひ父には日比より
好る物を調へて進め其身ハ寒き折も袈短き朽の衣一重を着るのみたれど水四郎は衣襖何
くれとあく寒のちぬ程は手當しつ對孝行等閑ならぬをのから人譽て譽ざるはあし斯て一日
例のごとく吉次は星を戴より起いで、父が食事の儲残かたなくはして、夫より市に赴き
人に雇れ些の錢を得て黄昏過る此又父が夕食の菜もも青物生魚の類て覺を遽がし立歸
るを水四郎ハ病床より其爲体を見てやよ吉次よ今鳥ハいつよも遅のりしゆへ奈何はせん
と案じつるよ能ころ歸り來りつれ茶も地爐に掛けて有れば大方ハ温もりてやあらんずらん

物はしくはなかりかといふ詞さへこみあぐる咳よまぐれて苦げなる形相を視て遠しく草
鞋脛巾を解棄つ、這上りて脊を撫さすり父傍よ按じ給ひ今鳥しも雇ハれし宅ハ殊も情深
き人にて父上ハ絆を語り侍りしかはろハ最便あからんとて價も極しよも多く拿らし給ひ
るに上よ夕飯さへ喰べて行ねとて鬼の牙見る如き飯に干維ろへて賜ひつれハ推辭も欠禮ふ
似たるゆへ翌朝飯の分迄も食置しつればなかく、ふ苦さを迄に腹ハとけれ父傍ハ家ハ獨在
てさころ淋しくたわしけん是 樹せ此 鮮き魚さへも其家主人の賜ひしありこれにて夕飯
をさうへ玉へ灸りもやせん煮もやせんさる詞の花の香の山茶も出花と一トつまみ入れ
たる欠瓦鐺用なき口も病父よ貪苦を見せじ知られじと偽る心を水四郎ハ推量すれど孝心を
無足にせじと打黙頭いととろとへる面持しつ臆に人に人鬼はあしとやらん世の諺も慮しか
らす爾る家あるハ其許が孝を天の感應し玉ふなめり孟宗が荷玉祥が鯉其例最多かりさわれ
我病ハ所謂者病ふして若かりし折の腕立力業が今は這身の仇となりつ斯行歩すら自由あら
ず居ながら食ふ身を以て美味を食さず病を増ん足下は日毎小身をつかへハ随分ともハ魚肉
を嗜も氣力をつけずは勞やせん我儕が事を念とせざよく、其身を保養せよと聞て吉次は
首を打ふり否々我ハ年若ければ疎食を喰ひ身をつかへハとと懶まとも覺へされど父御は門
へも出玉ハず竟日獨り留守と玉ハバさころ退屈し玉ふらめ酒をりとも飲玉ひて鬱をいらし

玉のすばは愈病も重りなんこれ烹割してまいらせんと言つゝ下りて流下なる粗板取て庖丁
 する魚よりも尙水四郎は吾子が切なる誠心に我腹を断るゝ思ひはふり落る涙を拂ひやをら
 病床を膝行いで、吉次が手を取て無理上座へ押直せば吉次は一切其心を得ず爺沙とこと何
 事をかなし給ふと最不審氣ある面体あるに當時水四郎は吉次に向ひ足下我儕がよとき匹夫
 下賜乃者を實の父と思ひ給ふものうら斯ハ大切にし給ふ事嬉しとを忝しとをなかく辞入
 盡し難くハハれを寤足下ハ我骨肉を分ち子ハあらず疾ふを道辭を語り聞きへく思ひつれど
 愚ある心にハ若や實を告るなら隔る心の出もやせんと今日までハ包みたれど今こつ實を告
 るぞかし思ひ出すも廿年久安の比又や有りけんて京師ハたもむき用事ハて、故郷へ立歸ら
 んとせし遠俄比に火起りて風烈しく猛火煽ふ燃あがるに我儕ハ頻りに道をいうげば焰の中
 をかいくり辛ふして三條の邊を過りしがとある朱門の下の溝の中ニ才斗りと思まき見
 の轉落て泣叫ぶ形勢今や燬死へう見ゆるにいとみしく其儘拾ひあげぬれど火の靜るを待て
 其親族をたづね嬰兒を聞さん暇なく且我儕も年來子を欲しと思ひ居る折なれば是天より
 授玉ふ子ならめと無端に嬉しく懐いたしいれて其處を去り其夜の舍りにつきて貰ひ乳など
 しつゝ熟々其兒を見るハ肌の守り裏をあらたむれば花橋と銘を誌せ玉一木を治め且へう
 の緒の書誌に金賣吉内が一子吉次と記し又某歳某日深栖生女唐立と櫛櫛のうちより約婚と

しるしたれば於 越我儕ハじめて骸き扱ハ世に名たハ金賣吉内ぬまの一子よておハせし
 か夫と知らねば庸人の子と思ふゆへこれ幸養育ばやと勝しが由緒ある人の子としりて還
 さるハ不仁ありさりて都ハハや遠ざりかれハ今更彼處へ戻りて還さんハいよハ以て難
 義なりとい奈何よしてよかりなんと左さま右さま思ひめぐらしけるが倍と心づきのゆのま
 ハにして打捨をかば焚死へうりまを助たれば一旦下野へ誘ひ行折を見合せ都へ登り事の顛
 末を告て還じまいらすとも遅からじと肚裏に思案しつうれより行路々々よて貫乳まつゝ
 下野へ立歸り假に我子を披露して其名を僅に桶の字を吉よかへしを行末を祝して付け名
 陰自性さハ然りながら其後ハ都へ至る便なくして思ハず數多の年を経るり足下は委細を去り
 給てねば我儕の實の父と心得斯正首々々しく介抱し給ふ程我儕ハを苦しく侍るかし鬼て
 を角ても老來て行歩さハ心よ任せざれ世の癩人一日も疾黄泉に懸かんころ願はしき身の今
 日よりの藥も飲じ翌にもあれ我儕眼を閉しなら足下急ぎ都へ登り守袋の名香を證ハ親子の
 名乗せば今日の襤褸ハ翌の錦忽地富貴の身となるへま斯る富有の人の子を貧苦のうちハ
 らせしハ心の過失なりと云了て破葛籠の底をかいたぐりて一箇の守袋を拿出して與るよぞ
 吉次ははじめて我素性を聞且駭き且喜び水四郎ハ向ひ扱ハ我儕ハ噂ハ聞し金賣桶内が子よ
 てあけけるとな繼ハ實父ハ誰にもせよ己に焼死ハかりハ助けられ此年來養育にあつたり

し大恩須彌をほひく、蒼海を却て淺し争う疎略になるへきぞと尙正首ある詞よいとく水
 四郎ハ感激し斯る孝子を這年月行儀もしれず亡ひし桶内ぬしが心の中爾ころ便なく思つ
 らめ世に類なき富家の子と生る、果報を持あから世にも稀なる貧困の我儕が家も成長不幸
 はこれ皆我利也ゆるし給へと打叩つしめりがちある親と子が話なかばへ畔道のしるきを草
 履で飛々に北來もの其名のみ唐天竺を一ツかせし伊場燕雀といふ醫師勿体作る咳のみ國手
 めかまて座に着け吉次は慌て塵打拂ひまづ此方へ招すれば水四郎が邊り近をり寄て容体
 を聞脈を、試眉を擧吉次に向ひ跡の月から見る時顔にせもよく元氣も増りさへいへ年老
 給ひたれば人參を用ひずんは應に治る事難し彼一藥の價、尋くへるゆへ我儕もこれを貯
 へず其許父の病を治しぬくは金五六兩才覺なして返與給へ爾あらば其極品を選求めて用ひ
 なんと聞く吉次も頭を掻き見給ふ如く我儕が家窮て貧しく翌の糧だに貯へふへき力さへな
 き渡世帯只一枚の金なりとも頼み調へ難き身に五枚六ひちをいりてか得んと當感面顯る
 へに水四郎ハ聞も取す吉次よ心を苦我も事なけれ鬻をいふごとく生存命て甲斐なき這
 身醫へ藥ハ香すぞと時至りなば木復せん管打捨ておきねかしといへど吉次ハ承ひかす否々
 子として親の病を見ても徒すことおれと今父が返與せし實父の記念たる
 守袋のうちよりを伽羅一株を取り上て伊場が前にさし置てこれハ故在りて持傳へへる花

桶といふ世にも稀なる名木ふして身にも壽もかへ難き寶なれど時の用よハ鼻もろく父
 が大事の一命よかゆる寶の有へきや這名木を沽却藥の代にといわせもあへず水四良ハ聲か
 けて否其石木ハ手放しがたし其許は父の遺物よて父子再會の証となる世に大切の品なれ
 ば日外或人これを知り五十金に購ふと首ひしを誰にもゆるさずしを我儕が藥の代に賣ら
 ば足下が實父へ義理たしと押とひむれ桶次ハさかすとしや實父の記念でも養父の命を
 救ふへき藥の價ハ代なを誰かこれを不可ありといはん是非とも賣ていなノらせじと義理
 と孝とに親と子が争ひへてぬ折りから小嚮より外面何に色ふ漢うの名木ハ我儕が買んと言
 ついやをら裏に入るに桶次ハ駭き且其人を見るに是高井屋利九郎といへる者あり這利九郎
 は些の貯録あるふ任せ貧しき人ハ金銀を貸與へ其利を食て世を渡る慳貪邪見の白癡あり從
 來斯る者の怪として慈悲の心露斗もく日の一日も違へば大く罵り辱め家の内の調度何に
 まれ理不尽に携歸り亦官府へ訴へて獄屋ハ繋がせなをれど人皆實金の減よけをされ齒
 をくひしバれ術もあし吉次も去ら比波が金を借りたるがハや其歸へき程も過れば日
 毎よ來りて賣つたる急なりける今鳥しも利九郎ハ笠に來か、りて一五二十を立聞て彼名
 木の高價なる品と聞これ安く買落して又利を得んを伎倆と吉次ハ向ひて首様ハ其身
 かゝる高金にかなるへき品を持たながら我儕が貸たる金を歸さるは腹悪けれされど我儕は

又佛心よて今其身の孝心を聞其名木せやらんを覚め其身望をさげせんやうの思へど五十金の六十金の爾を減金よの買難し廿金ならんよは買求め其うちふの去出貸たる五兩の金の元利を引き残は其身にまいらせんと云つゝ矢庭に彼名木を掠奪し十有余金に券添へ橋次が邊へさしをけば橋次これをを見て再利九郎よ向ひ這個名木の故有て身にも壽もかへがたき大切の品なれど父が病の藥を覚めんためあればされど五十金よをら賣らざりし品を僅廿金よは買難し且是を質としを廿金を貸給へ後日よ金を調ハハ其名木をバ歸し給ひてんやといふを聞て利九郎の還奴所先斯貧しきなかにて争り頼に廿金を調ひ得べきまづ彼がいふにまかせて其期月の切を待て我品を爲へしと肚裏に思案まつろの左も右もすべけれど質とあらば凡百日を限て其うち此金を調ひ歸し給はずば還名木の我物なりよく其心を得給ふべしと云すて、伽羅を懐し押入て遷しくも出さぬ吉次の不憶も拾枚余の金を得て喜ぶこと限なく頼に其うち五枚を燕雀に遞與せば燕雀の打照頭頼りよ其心操を質し金を携へて立歸りぬ判説利九郎は吉次を賺まて花橋を獲て心中大きよ喜び急ぎ吾家をさして還らんとせま途ふて日比隔あき友なる尼樹屋韓三といへる藥商客よ遇り利九郎斯と見らより韓三を呼かけて今日の始末を語り彼花橋をとりいだして見せしむるよ韓三の左見右見て大よ驚きこの世よ稀なる名木なれば若國人有て高貴の人に沽らば百金の物の有りぬべけれど捨賣に

までも四十金や五十金ふなりぬべしと聞て利九郎の大に歎ひ我此名木を唯廿兩の質にとれど逆も受る事でのなし爾あるときと二三拾の利分を獲り目前なり且前祝に一盃を傾くべしとて韓三を誘ひ一軒の酒肆に入り更に數盃を傾て韓三に別れ利九郎の我家よ立還らんとせしが當時忽地十二分の酔を發し一步は高く一步はひく、眼々踰々として歩來りしに前程なる木の下に誰たき捨し野火ありけり爰なん總社村といふ處にして林のうちよ總社明神の社あり是下毛野國の總社也其前に室の八嶋あり利九郎の今還處へ來て風暴うるのしく風ろなくと吹て、快に急木の下ふやすらひ雲時酔を醒さばやと爰の芝生に匍匐て遠近を眺め獨笑し居りしが素より多の酒を飲たる事なればいつ眠ることもなく輒轉前後も知らず寢入りしが時うつもよ從ひ颯と吹風の稍を鳴らしはらくと落る車よく寐入たる利九郎が顔にふれれば九郎の現心よ手以てのらひ云と云つゝ寢飯りて更に生躰をかりしが奈何のまげん懐より花吉の名木の轉ひ落て焚捨し野火の邊りに入りたりけん忽ち異香四方に薫じ踏都とまてあたりを充れど利九郎の香を覺す野の聲はますゝ高く熟睡してせたりける話兩野分爰に又彼吉内が許し寄食せし美佐崎太郎爲祐の此邊りのをも見ればやとて麗なれ空よりうれ出備哥を詠て獨興にいらしがや夕陽西よ傾くよ駭き忽ち立歸らんとして此邊を遷しに名香の薫り四林に充るを大きに怪まみ雲時脚踏て四丁を視るに只在る樹下ふ

獨りの漢兒醉臥してありろの傍の野火の焚さしる邊りにて得たれぬ燕の鼻を穿よす太郎
 は不審行立て、情これを見るに目なれぬ一木の火の邊りにある紙の是をめりて疾も推し
 進ましく手を取らば、これを見るに案にたがはず伽羅の一本よまて而も包める紙は花橋とま
 るしありけれ、爲祐と見て且駭き且恨び扱ひ異香の薫じたその道名本の葉なりけり抑此漢
 奈何にして斯る名木を所持せし者ならんぞ左見右見て躊躇居りける、利九郎は這時漸々目
 覺て心付やをら身を起して懐袂を數回かひさぐりて花橋の見へぬ、駭き只看は傍に美佐
 崎が彼名木を手まぐりぬる体を見て愕然として道奴他の難匪せしを疑て、懐にせし物を拿
 るよ打定倫兒取極れり疾く此方へ返與せといひさま奪ひとらんとするに爲祐も大に怒り汝
 何者なれば吾をさきて倫兒といふや吾儕は爰に落てありしゆへ拾ひとれるなりと遷く懐に
 めさめんとするよ利九郎の益々悲し吾首より大切なる二十金といふ何堵を出して買求たる
 そのを奪ひとらんとするゆへ倫兒といひまは吾過にあらずと強て身飯さんとするよ太郎は
 猶疑興さじと其手首を縛め要行んとするを利九郎の太郎が袂を確と捕へ取戻さんとをるよ
 太郎は六に怒り道奴と云ひさま氷の如き刃引抜き唯一刀ふ斬殺し後白波と遊失せぬり

第八回

一炷の名香骨肉を誤ち
 非道の白刃三性を獲す

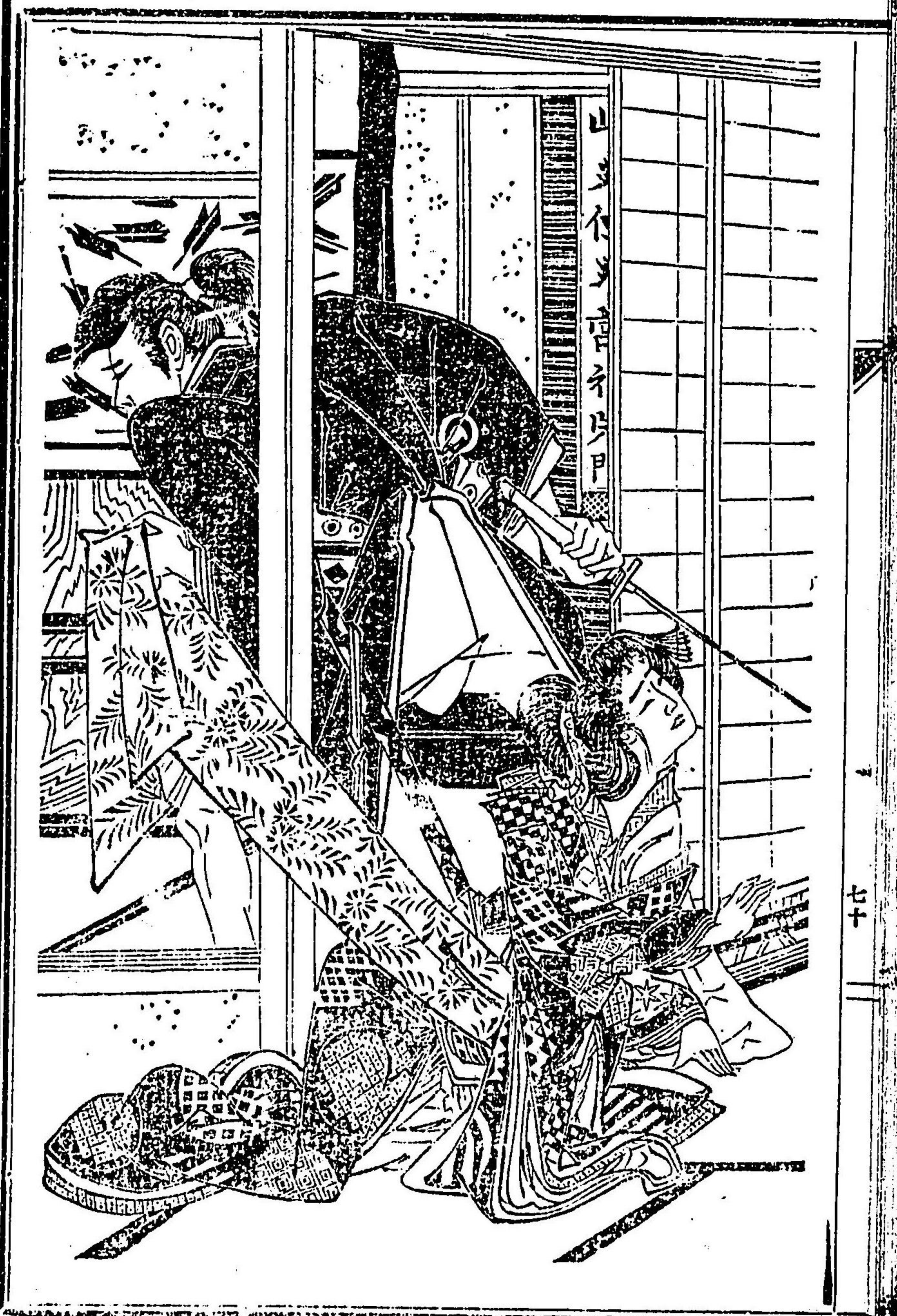
美佐崎爲祐は其夜さら家よ還り竊に袖衣ふ今鳥の大略を語り名香と黄金の二種を見するに
 袖衣はこれを見て少刻沈吟していぬりしが稍有て太郎は向良君賢に發跡給ふべき河清れり
 喜給へといふ太郎は一切其心をしらす故を問ふに袖衣いへらく良君未近比此家に來り給へ
 ば其詳なるを知り給ふまじひれと阿翁吉内ぬし當よ妾よ語給ふに、原來吾一個の男兒あり
 しが二才の歲地魚の災のまざりより行術しれず然れ安部の康親ねーが考ふに廿歳を過て
 必環會へしと宣しも僕ふればいや廿歳斗になりぬれば若や還らで實の悴は遺事の有んもの
 うられず彼よの世に類なき花橋といふ名香に臍緒の書附を添ききぬればよしや顔の知すと
 も香の薫を證よしと名乗遇んと這平月心を付て捜せしかどうれうと思ふ物もなしと且喜歎
 息し給ひしが扱ひ遺香を嗜持し其主か此家の主が實の子なる吉次とやらふてや有んすらん
 君の計らう道名木を得給ふ上の云々斗ひ給ひあは君を實の子と思わん然んには永く道家よ
 足を留給のみあらす主橋内世を去の良君と妾生涯歡樂を極ん事易かるへし秘して人よあ
 いられ給ひうと最こまやかと説示すよ太郎は欣然として大に喜び我儕詐の計略を以て首尾
 とく此家よ入りこみ又辭を巧みよて主翁の心ようなふといへさも從來久戀の案よあらねば
 ひさしく止る事かたくこれのみ心苦しと思ひぬるよ斯不憶この名木を得る事備ふ天賜
 にして月上水人其許と吾良縁をむすべしめ給ふものなめりて兩個竊に額を突合して閑談數

刻よ及ぶを知る人更なかりける扱も頃ハ既ハ夏の半入まで五月雨降つゞきていと物淋しき吉内へ獨小屋のうちふ在て前程往時を思ひつゞく吉次踪跡なくなりてハ廿年にもよりぬれ今に於て其在家の知れざるは尙や亡人の數入りもやよつる斯吾家富て何くらからねと白銀も黄金も玉も子に増す寶たへてなしと連に懐舊の涙せきあへぬ適何處ともなく名香の薫り分々として鼻をうがつに吉内ハ眉を擧め意中ハ想らく這薫りて賽べやうもなき我家に秘藏せし花桶違わす彼香ハ予家の外に又あるべきいはれなきに何人かこれを炷らそにやと居室を立いでて其香を的ふたづね行入彼美佐崎爲祐が部家の邊りなるに而不審と紙門のすきまより窺ひ見るに太郎ハ壁に向ひ机の上ハ香を炷き一心不乱に念じぬる身躰つやゝ必得がたく吉内ハ徐々紙門をねり開きて裏に入る音ハ太郎は後方を見返して狂々容を改めのハ家翁の刀禰自爰爰來給ひしハ何等の示す事ありやと顔の汗を拭ふに吉内ハ當時太郎ふ打むかひ絆卒示にハ似ぬれども汝は問ふべき事ころあれ吾儕今鳥適平日の閑を得て獨小屋よとじ籠り偶然として行末越方の事を思つゞけ連りに歎息せまけから必覺への名木の薫り最不審小審を立出不覺爰爰來て見れば正しく香の薫ころ這小屋の裏なるふますゝ不審ハれやねハ目前問詰て疑念をいらすふしじと思ひ扱ころ其許を駭せり尙や此香の名を花桶と呼び是ハ兩々の守袋と筒様ハの書付が添へてハあらざりしか抑も

汝奈何よしてこれを持傳へ給ふにや緣故を詳に語りて給ハれかしと問ハれて太郎ハ眉を擧め奈何も此香の名ハ花立花と呼て我亡父母の紀念なれば大事よかけよと乳母何かしがいへりしハ今將耳の底ハ残りてはべり響に爰へ來りし時聞へまひらせしごとくまだ頑是なきころの頂ハ父母にわかれてうれよりも成長るまで遠近ハ呻吟たれハのうちに守袋も書物を何國へか亡ひしものならぬ然ハ此一木をば父とも母ともをばへて戀まき折ハくゆらして僅に想いを散ずるのみ刀禰ハ又奈何にして此名香の名を花桶と知り給ふハ最不審ハるかしと聞より吉内ハ小膝をすゝめ扱ハ其許ハ道年來尋覓し我子也とばかりにてハ合點ハゆくまじ吾儕元來一個男兒有りしが一才の歳池魚の災によつて行衛しれず尤其當時陰陽博士安部の康親ぬしのもめとにハ二十歳を過て恙なく環會べきよしを宣へり素よりハの兒の守り袋の裏ハハ我手づから認たる臍緒の書付ハ是も花立花を添たむころ慥ある證據なれ因是情思ふふ吾家池魚の禍のみざり其許義親の行へりなせして焔なかハ救ひとりて我兒とあし育あげし後實を以て告ざりしは隔ハ心の出もやせんと故意うれとハ告ざりしものならん其許浴陽の産と云のみならず花立花を處持するからハ賽かたなき我子の吉次なる事明けし康親ぬしの勘がハ爰に符合する上からハ何の疑べきあらずと年頃ハ愁眉を開き急ハ袖衣を呼て云々の由を語り親子の縁盡すして今日ハからずも恙なく遇見る事の嬉しけれと悦び勇む爲

休を見を袖衣の太郎と顔見合心中、笑を合計略の成を歡ぶとへども、陽には態駭けるさまを
 なし頻りに太郎が才色のすぐれたるを稱美するも告内の一黙は、是等の事を知らねば
 たゞち告日良辰をえらみ家衆們を聚合し一伍一什を語り聞せ此日と日太郎をして告次と
 名を改めさせ扱云様今迄の其委事はいつざりしが實汝は櫛椽のうちよ字やし配ありう
 は當國深栖の領主深栖陵之助元重と云人の小娘に、其齡の其許を同く名を唐立と呼つ標
 致といひ心緒と云又類なき處女なれば近に此由を洛陽に告遣順入呼下きて婚姻を取結すべ
 し喜び給へと始て聞太郎爲祐其座にありわふ袖衣と目を見合し詞なく黙然として居しが女
 心に袖衣の疾態へ兼柳眉を逆守眼を見たり太郎の方を努目て既ふ口をひらめんとする行粧
 なるも爲祐のやくも其心を推し氣觸を見せじと咳に打まざらして再び告内に向ひ宜ふ處の
 爾る緯ながら男子三十にして室ありとい禮の教へ吾儕三十の穉もあらず且駭しき世の中な
 るに女の身を獨都より呼下さん事道も遙けきけ容易緯にあらじ日婚姻の義け緩々を計り
 給へと左右に托して推辞とを告内へ取て赦さず否々爾はあらば唐立既ふ年を二十歳に余れ
 道年來其許の爲に苦節を守り何方へも嫁せず雪操を全せし適れ貞女の唐立といつ迄か物
 を思はずべき其許が所在の知れし上は少しも早く婚姻をどこのへ疾初孫の顔を視て我々が
 心を休め共侶に孝行憑はべるかしと余義なき辭に爲祐の再び返す詞なく且假に領諾して其

座を退ぬ斯て袖衣の廣吉次の太郎が傍に人なき時を見ていふやう其許奈何なれば往昔の誓
 を忘れ都女郎の唐立ぬしとやらんと婚姻をなし給ふ御心にや實小男の心と秋の空と頼がた
 なき謠も驅につまされてへべるかまと或ひの歎き或ひの怒り物狂ひしき形勢に太郎の殆諫か
 ねてその脊をかいさすり吾も其許を退くいかでか仇女と枕をかかさんと思ひもよ
 らずさわれ斯る時宜に及びる上へ強てこれを固辭に計り謀計の忍水の泡とあるべ
 末是れよつて我思ふに先其唐立とやらんと婚姻して阿家翁に疑をさけて後又東も其緩
 に計策を施すべき其許要す仍なき進止をし他へ悟られ給ひぞ刀にかけて我其許をの
 けて嘗て外心なしと天地と誓て視せければ袖衣を良心解て斯迄宜ふ辞とも詐りにはあらじ
 と尙行末の事など何くれと相談ぬ斯てより太良は愈我身を高ぶらず上を敵ひ下を憐む程
 に誰有てこれを怪しむ者なく橋内ころ淑子を獲たりと羨ぬものなりける爾る程に橋内
 の通頃太郎が我衆を來りし緯の首より花桶の名香の奇特にてはうらずも親子の名乗せし事
 又太郎が才色の勝れたる事迄一五十一書翰よした、ゆ家の老僕篤内と云者も其心を得さし
 即日京洛へ登せければ陵之助は道誓を披らぎ見て限りなく悦び順て篤内を留めたきて管待
 ま小娘と斯と告しらせ不日下毛へ下すべければ其許も其準備も給へと聞より唐立の年頃
 の願ひの叶ふを喜ぶふつ付けても又父母も別れて知らぬ國へ赴かんことの哀しく先立もの



涙なるに光重のこれを見て其許平居の志操にも似げなくなきて斯敷給ふを總て女は家よめるうちハ父母を以て天とを既ふ嫁を心け及んでハ夫とを斯らうハ我々が事を念とせず夫吉次のいふも更なり眞時内ぬしよよく孝を尽し給へ下野ハ吾領地なれば他國へ赴よふはあらず吾を遠からず彼地へ下りて婚吉次を對面せんと旅の調度發かたなくといへせて篤内ハ又吾家縁を添へて下野へ下り下りける斯て唐立ハ心細くも知らぬ旅路に赴けるが日を経て下毛ある高野の庄よいたりければ吉内が悦び大かたならず日を撰て婚姻を調へせんと其日を俟つ程は是彼の喜びを演じて遠近の朋友吉内が家に來訪して門外長者の車轍絶へず去る程ハ廣吉次の爲祐のまづ御宇なる唐立が行粧を關覽るハ將ハ翠袖雲環更ハ人間に有るべやうと覺へざるハ素より色好むる太郎爲祐忽魂を天外ハ飛し吾都に長成り普く文君弄玉を視たれども未斯る美人ハありずはからず吾儕かハ美婦人を妻にせんころ願ふてもなき幸なりと意の中ハ喜び婚姻の日を算へて待程ハ願て其日よも至りければ山河の珍珍を尽し洞房花燭の式かたの如く執行して吉次の唐立を誘ひて巫山の夢に入るハ袖衣ハ形勢を見て妬きことかざりなく必惡しとて袋引かつきて打臥しければ聞しきよと聞まされて訪人もなき涙のみハふり落て獨り心をいためける斯て唐立ハ吉次と夫婦中睦しく半年ばかりの光陰をすませしが思ふハたまて夫ハ性質の浮薄よし且荒淫あるを見

て心の中鬱々として樂まざる從來義正しき女なれば夫婦別ありの教へを守り誓ハ苟且にも夫が邊りあんどへまらず吉内よつかゆる事最正首なり一日太郎の獨り我部屋の中に在て源氏伊勢物語なんどの文をく緋綴りて其身を光君在五中將の思ひよせて微笑いとりし折柄唐立の手づから茶碗を奉て吉次がほざり近くよつて茶を呈するハ吉次の断と見るより讀さしたる文をのいやりて勿体なき吾儕いかなる神の憑けて君のこととき美人と枕席を俱よするのみも斯町噂なる管待に預りまひらするに無越洪福なりせめて其報ひにハ斯ころせめとやをら手を奪て引よせんまするをふり拂ひてハ正なき事し玉ひつ君と妾ハ父母のゆるし玉ひし緋衣ハハハハハ夫婦別あり争か同席に連りて戯れかたらハ是正に禽獸ハ等し關雎ハ樂んで流せず悲で傷らずとか聞ハハハ君從來漢字をも知り聖賢の典をも粗學び玉へけれハかりの事ハ妾かいわすともころしめまてありぬハまといハれて太郎ハ應もなく腋の下に冷汗を流しきへもいりたき風情なり左右するうち袖衣ハ唐立がたり見見へぬに這奴又太郎が傍へいゆきて共侶ハ妾が事ハ識てやあらんずらん最前曉の出しを彼等が所業なめりと怒氣胸中ハ溢れて遠く太郎が子舎の邊へ行ハ窺ふに何やらん向ひてしめやかハ物語して居る爲体を視るより妬きこと限りなくハ荒らかみ紙門を押ひらき裡ハ入て兩個を信と白眼を其許們は奈何親々の救せし女夫あればとて白晝斯とらうひで在らんハ余りハ見苦し女は女

とも思はるべけれど橋次ぬしが我物顔に傍を放ち玉のさるの奈何ぞやと柳眉を逆書るふ
 太郎の故意うら空吹ころ袖衣御前何事をか宣ふぞ生るはの室を問ふし死の穴を問ふる
 これを志子の本意といふ榊原のうちとぞ字して廿歳あまりの年を経て不思議な環會しも
 の争 疎略なるべきやとらぬだに精練の妻の堂をれるさすを聞うれにもまたる年來の
 貞操節義の酬いはいばかり大事よかけたりとも其心緒は此なれば是九午が一毛なりと飲ま
 で媚と一言を聞より袖衣勃然として大ひに憤り焰のごとき息を吻とつきあな怒めま扱は是
 迄海山を誓し事も偽よまよるれとて増花に見のへられて何樂も東ても西ても捨られ
 し身の愁ふ存命へていとしと思ふ吾夫を他人の花と詠させ余所に見るところ方見けれ戀の仇
 るる荒淫婦とぞ安穩よれくべきや咽へ喰ひ付てあど俱に迷土に誘んといふ音響きへ皺枯て
 物狂のしき形相の恰を鬼女に異ならや唐立めがけて飛菓を太郎の懐てかけへたて刀の柄に
 手を懸て信と疾視聲ふりさて父の事なれば最前よりの失離をもゆるまてれけつつけあ
 がる法界格氣の出傍題戀の敵の吾夫のどの誰に對していふ事や現在妻の目前不正語をいわ
 れて一挙の大人へも影隨ころ退すやと教團は唐立とわさ恐ろしき戦慄送んとする裙を
 しかと引捕らへ送るさて遊さんや其許の委細を知らざれば道奴が實の吉次にて宇せし良人
 ぞと第一條に思はれんが道奴の實の吉次にあらす妾が浴に有末日より二世とかいせし夫あ

身との悪さへも口バいるよ太郎今は堪へ兼ねのれ血迷何事を言とも誰のうれを寤とせん
 いで息の音を止てくれんと水のごとき又を故片一打と斬電はは寝さバ寝せと立向ふあれ浮
 雲ととむる際利白刃のそれて唐立が肩先深く新込れ阿呀とばかり倒れ俯す南無三寶と
 太郎が仰天憎くき女め覺醒せよと袖衣目撃て閃す電光石火又一刀兩断惡の報を心地よき人
 や來るを爲祐が血刀さげて立あはり一息吻をつく折らら此忍劇入瀧きて阿婆翁橋内退以刀
 に走來りともみれば橋次が血刀是活たる傍に袖衣唐を宋入染て伏居たるは橋内慌忙てこは橋
 次物入や狂ふ心をとづりて縁故を詳と語れと詳おけられ毒を喰はし血迄と物をもいわず踏
 地を研て流れば橋内、白とさへへ空は除二足三足下りしが運の盡みや踏へつし様より下へ
 のけさやも倒るゝ處を疊のけ難く其處へ斬倒し袋をもちて血刀の血押拭ひ白刃をバ頓て刀
 室かへおさめても納りはさき此場の時誼如何はせんと躊躇しが時ハ將又黄昏に向々として
 母屋入離れし室なれば箇程の騒動を知る者絶てなかりけるよ太部ハ四下を見まはして天
 の與へと打脱び三トハ計走るととす見咎められぬ其内はと既之愛を遁れ出んとせし當時
 天俄に結途廻り池水動揺すらよと見へけるよ水氣益々立登り許多の蛙忽然と顯れいで諸聲
 合して鳴連るに太郎の吃と眼をこめめあら不思議や今吉内を殺害なせし鮮血渠が帯きたる
 刀にうゝるを覺へして池水俄に逆立て數萬の蛙聲を發すハ扱ハ聞及びつる此家の重寶阿鴨

丸に極れり仰此月の威徳に鯉口を離る、時何國ともなく蛙の聲し又鮮血の穢れも觸るゝときは數多の齋らひるゝと聞しは、此場の形相こいよき物ころ手いれりと選しく吉内が帶せし刀を奪て拔放去籍見て適の名作なれと意中喜び手水鉢の水を注りて穢れを清めて刀室にたさむらふ蛙も消うせ天を晴て元の如くならふ、其奇特を感じ我刀を捨てこれを帶しなごせらうち愛へ人の來るけいひす打驚て怖しく庭に飛下り見越の松よ懸登、忽外方にありだつひまよやれ人殺しよと関容子見つけられていかなわじと北をさして走去らふ、追人を見て後方より炬を振照らし夥の人追進來るさまに爲祐の益々必忙水の根岩角の嫌ひなく喘々三里許走りしが見体勞れ咽喝き足に棗に貫れ、殆進退極りて奈何いせんと行立ふ、越に岐の路ありて南北にわたりたり北の方ふすゝめば二荒山へ行道あり南の方ふたどれば武藏へ至る道なり太郎は臆ある月影よすかし見れば一軒の辻堂ありて椽間に一個の大法師最太やかなる拐技を突立休息居たり其容貌逞しく只者ならをに見へよける、畢竟此法師は何等の個にして又如生物語かあるうへ五の卷の首説ん看官讀得てしるべし

武藏坊辨慶物語卷之四終

